

桜ヶ峰（2）遺跡

国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告

1997

青森県教育委員会

桜ヶ峰（2）遺跡

国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告

1997

青森県教育委員会

序

津軽平野に位置する五所川原市には、観音林遺跡や前田野目の須恵器窯跡をはじめ数多くの埋蔵文化財が包蔵されております。青森県教育委員会では、国道101号浪岡五所川原道路（津軽自動車道）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を平成7年度から実施しております。

この度、平成7年度に発掘調査した五所川原市桜ヶ峰(2)遺跡の報告書がまとまり、これを刊行することになりました。

この調査成果が広く文化財の保護と研究に活用され、また地域社会の歴史学習や地域住民の文化財保護の意識の高揚につながることを期待したいと存じます。

最後になりましたが、調査の実施及び報告書の作成にあたり御指導、御協力を賜った関係各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

青森県教育委員会

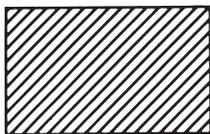
教育長 松 森 永 祐

例 言

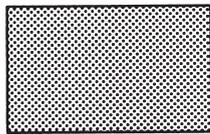
- 1 本報告書は、平成7年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した国道101号浪岡五所川原道路建設事業に係る桜ヶ峰（2）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の青森県遺跡登録番号は05059である。
- 3 本報告書の執筆者名は、依頼原稿については文頭に、その他は文末に記してある。
- 4 石質鑑定・地形及び地質については、青森県埋蔵文化財調査センターの伊藤昭雄が行なった。
- 5 本報告書に掲載した遺跡の位置図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図（浪岡・大釈迦）に基づき作成したものである。
- 6 挿図の縮尺は、図ごとに示した。尚、遺物写真の縮尺は統一していない。
- 7 土層の注記は、『新版標準土色帖』（小山・竹原；1979）を参照した。
- 8 各遺構の規模については、それぞれ最大値を計測した。
- 9 引用・参考文献については本文末に収めた。文中に引用した文献については、著者名・編集機関と西暦年で示した。
- 10 出土遺物・実測図・写真等は、現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 11 挿図中に使用したスクリーン・トーンは以下の通りである。

スクリーン・トーン凡例

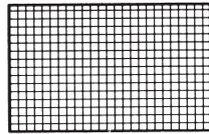
〈遺構実測図〉



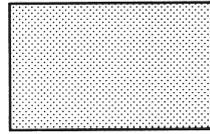
地山



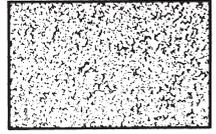
火山灰



炭化物

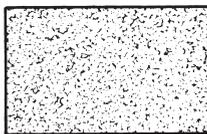


道跡(硬化面)

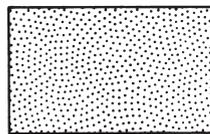


(焼土)

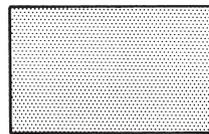
〈遺物実測図〉



スリ



タタキ・クボミ



火を受けた痕

- 12 発掘調査及び本報告書の作成にあたっては、下記の方々から御協力・御助言を得た（順不同・敬称略）。

上野秀一、久保泰、山口義伸、鈴木徹、半沢紀、工藤清泰、本田泰貴

本文目次

序

例言

目次

第I章 調査概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第3節 調査の方法	2
第4節 調査の経過	2
第II章 遺跡周辺の地形と地質	7
第1節 地理的位置と周辺の地形	7
第2節 周辺の地質及び遺跡の土層	9
第III章 検出遺構と出土遺物	13
第1節 土坑	13
第2節 焼土状遺構	17
第3節 近代の道跡	17
第IV章 遺構外の出土遺物	23
第1節 土器	23
第2節 石器ほか	30
(1) 縄文時代の石器	
(2) 陶磁器	
(3) 銭貨	
第V章 まとめ	36
引用・参考文献	36
写真図版	37
報告書抄録	47

図 版 目 次

図1	桜ヶ峰(2)遺跡位置図	4
図2	遺跡周辺地形図及び遺構配置図	5
図3	五所川原市七和地域の地形分類図	8
図4	桜ヶ峰(2)遺跡内土層実測図	11
図5	第1号・第2号土坑	14
図6	第3号・第4号土坑	16
図7	第1号～第3号焼土	18
図8	第4号～第9号焼土	19
図9	第10号～第14号焼土	20
図10	第1号道跡	21
図11	第2号・第3号道跡	22
図12	遺構外の出土遺物(縄文土器その1)	24
図13	遺構外の出土遺物(縄文土器その2)	25
図14	遺構外の出土遺物(縄文土器その3)	26
図15	遺構外の出土遺物(弥生土器)	27
図16	遺構外の出土遺物(続縄文土器・土師器・須恵器)	28
図17	遺構外の出土遺物(縄文時代の石器その1)	32
図18	遺構外の出土遺物(縄文時代の石器その2)	33
図19	遺構外の出土遺物(縄文時代の石器その3)	34
図20	遺構外の出土遺物(陶磁器・銭貨)	35

第 I 章 調査概要

第 1 節 調査に至る経過

国道101号浪岡五所川原道路は、南津軽郡浪岡町から五所川原市までの全長15.7kmを結ぶ自動車専用道路で、津軽自動車道の一部を形成するものである。平成3年度に青森県の事業として着手され、平成5年度からは建設省の事業となっている。

青森県教育庁文化課では、平成3年度に津軽自動車道建設事業と文化財保護の調整を図るため分布調査を実施した（『青森県遺跡詳細分布調査報告書IV』青森県埋蔵文化財報告書第146集）。

桜ヶ峰(2)遺跡はその際に新たに確認された遺跡で、青森県遺跡番号は05059で、縄文時代の遺跡とされた。

平成7年度に桜ヶ峰(2)遺跡の発掘調査を青森県埋蔵文化財調査センターが実施することになり、平成7年7月17日から調査を開始した。 (木村 鐵次郎)

第 2 節 調査要項

1 調査目的

国道101号浪岡五所川原道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する桜ヶ峰(2)遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成7年7月17日から同年11月2日まで

3 遺跡名及び所在地 桜ヶ峰(2)遺跡（青森県遺跡番号05059）
五所川原市大字前田野目字桜ヶ峰86-9、外

4 調査対象面積 5,200平方メートル

5 調査委託者 建設省東北地方建設局青森工事事務所

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関 五所川原市教育委員会、西北教育事務所

9 調査参加者

調査指導員	村越 潔	青森大学教授（考古学）
調査協力員	釜菴 祐	五所川原市教育委員会教育長
調査員	佐藤 仁	浪岡町史編纂室長（歴史学）
	市川 金丸	青森県考古学会会長（考古学）
	赤平 智尚	青森県立柏木農業高等学校教諭（考古学）

10 調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

調査第一課	副参事・課長	北林 八洲晴(平成8年3月31日退職)
	主 事	相澤 治
	主 事	赤羽 真由美
調査補助員	中村 行西、成田 昭美	
	金枝 鉄明、館山 裕子	

第3節 調査の方法

1 調査区の設定

調査区域内に存在する道路建設用幅杭（建設省設置）No.118及びNo.119の2本を結び、東西ラインの基準として4m×4mのメッシュを組んだ。グリッド番号は、北から南方向にアルファベットを付し、西から東方向に算用数字を付して用いた。グリッドの名称は西北隅の交点を利用することとした。尚、グリッドの南北ラインはN-57-Eである。

測量原点（B・M）は、調査区域の西側付近に存在した工事用測量原点（59.689m）からレベル移動を行い、調査区域内に数カ所設置した。

2 発掘調査

発掘区域内のほとんどが傾斜地であるため、土層の堆積状態をみるために東西方向にはFライン、南北方向には80ライン、102ラインにそれぞれ土層観察用のベルトを設定し、グリッド毎に掘り下げを開始した。遺構については、四分法・二分法を用いて精査を行った。遺構の実測図については、土坑・焼土は20分の1、道路跡は40分の1で作成した。包含層出土遺物については、グリッド毎に層位を確認しながら取り上げを行った。また、必要に応じてポイントを記録した。写真撮影は、35ミリ小型カメラを用い、フィルムはモノクローム、カラーリバーサルの2種類を使用した。（赤羽 真由美）

第4節 調査の経過

平成7年7月14日までに仮設建物（プレハブ）を3棟設置し、17日より調査を開始した。調査は、道路建設用の幅杭の2本を基準とした中心軸線を設定し、グリッドの設定から始めた。これと並行して調査区内の環境整備を行い、粗堀を開始した。粗堀は調査区東側及び中央部北側斜面から始めた。調査区域外に排土置き場が確保できなかったため、排土は調査区中央部に置き、重機で所定の処理場

へ随時搬出することとした。

基本層序を知るため2カ所のトレンチを設けたが、調査区は斜面を含み、最も低い地点とは約11mの比高差があるため、その地点によって全く土層の堆積状態が異なっていた。結局東西方向に1本(Fライン)、南北方向に2本(80ライン・102ライン)のトレンチを設定して斜面の上から下までの堆積状況を観察した。

表土及び白頭山火山灰の含まれる層の上部まで掘り下げた時点でかなりの数の黒いシミが確認されたが、ほとんどが風倒木痕であることが判明した。この時点で硬く踏みしまった道跡と土坑数基を検出した。道跡と土坑の精査を行いつつ、その範囲を残して更に全体を地山まで掘り下げて遺構確認を行った。その結果、調査区中央部の斜面の両脇にある緩やかな谷地形部分から、土坑1基と焼土層の分布が確認された。

調査区域内の遺構確認を終了し、9月中旬より路線内の調査区域外縁のトレンチ発掘を併せて行った。遺物がややまとまって出土した地点を広げて調査したが、遺構は検出されなかった。11月2日、調査を全て終了した。

(赤羽 真由美)

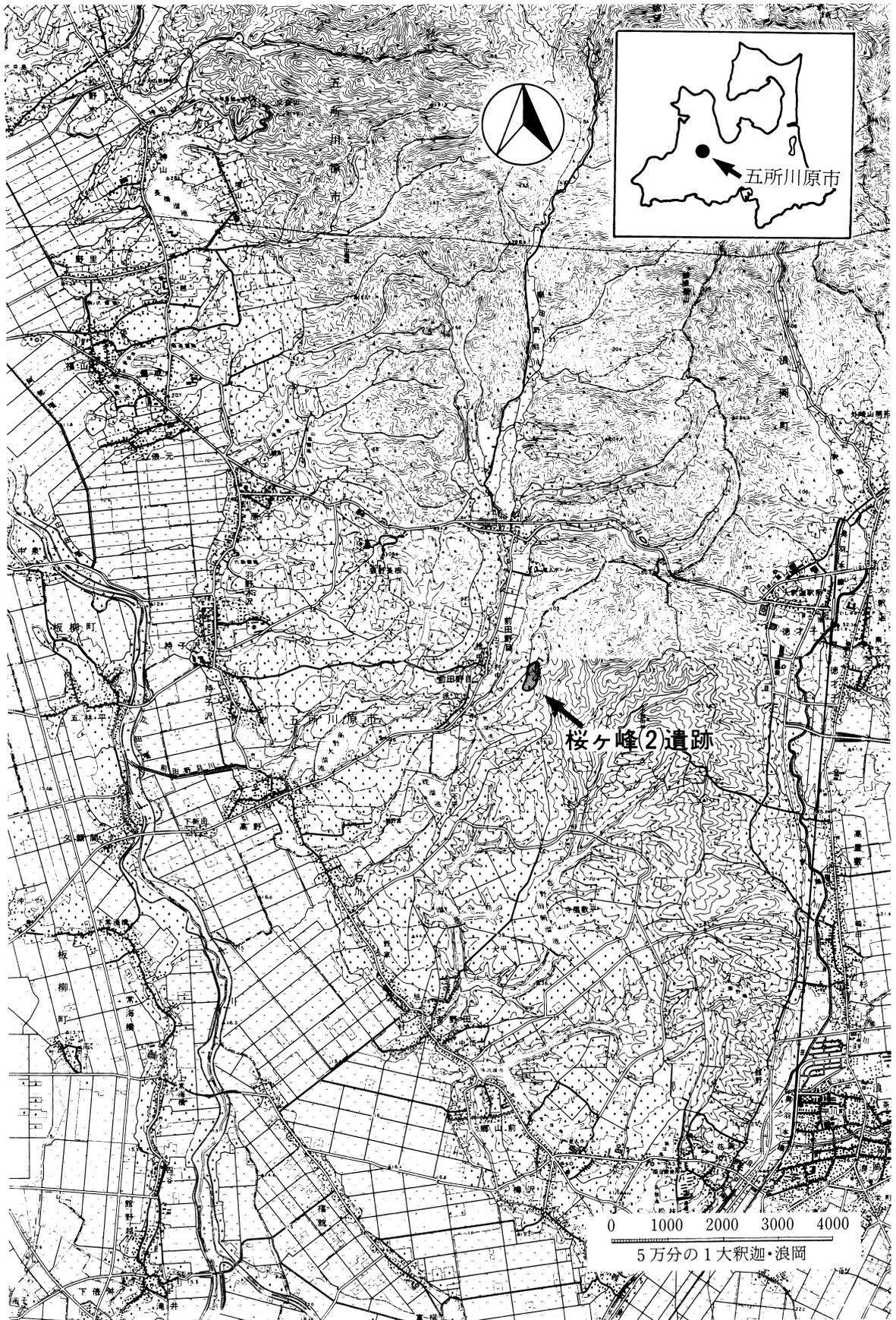


図1 桜ヶ峰(2)遺跡位置図

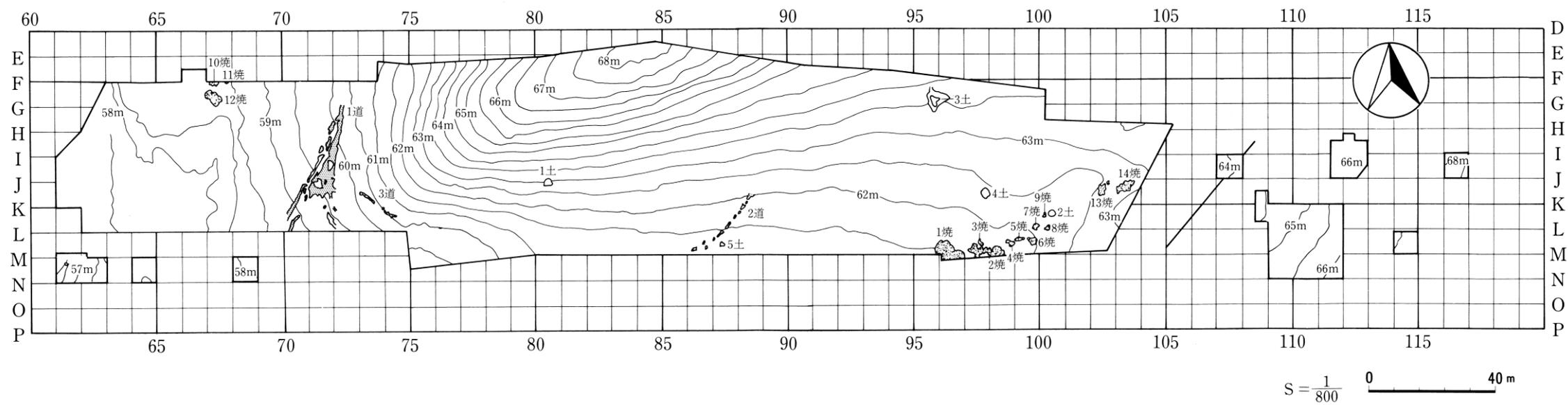
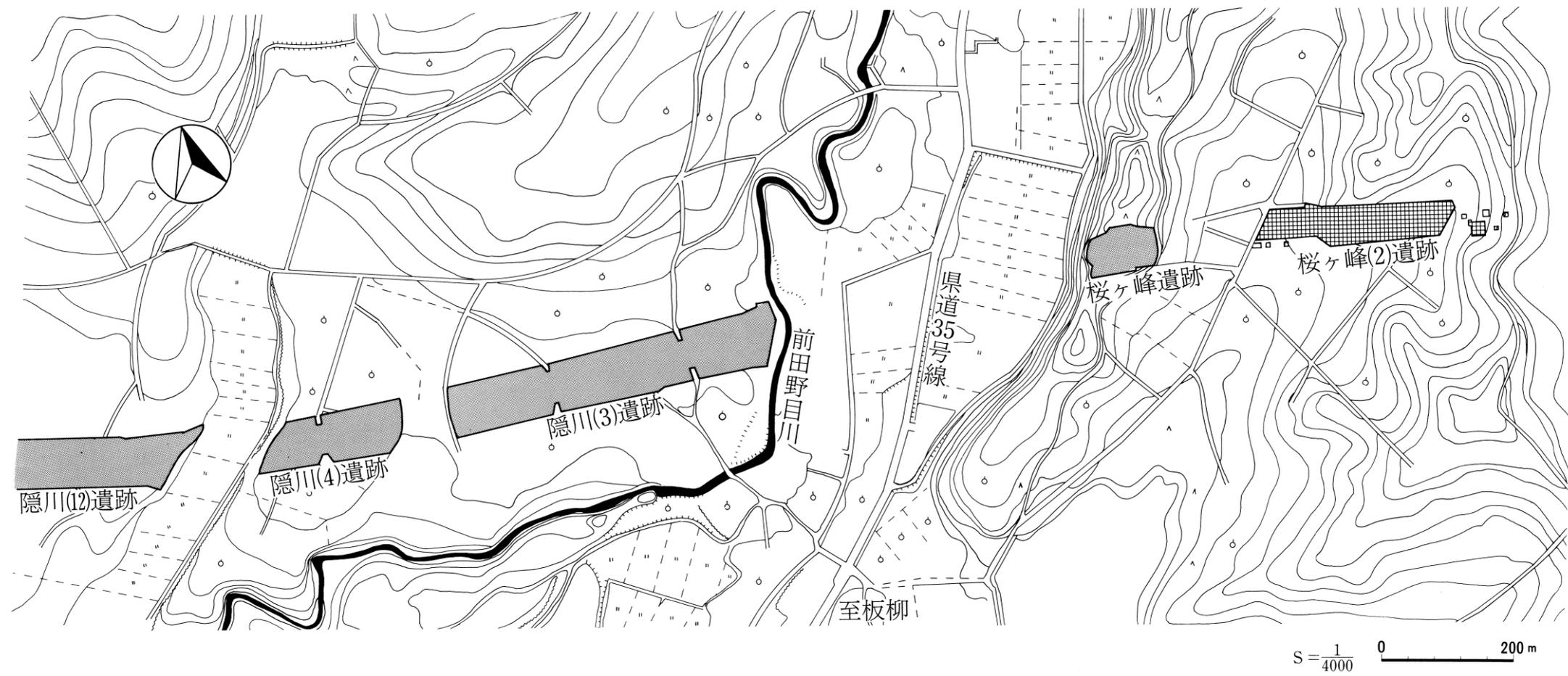


図2 遺跡周辺地形図及び遺構配置図

第II章 遺跡周辺の地形と地質

第1節 地理的位置と周辺の地形

桜ヶ峰(2)遺跡は、標高が57~69mの前田野目台地~大釈迦丘陵上に位置する。調査区域は、北のほぼ中央を最高点として東北東~西南西に延びる尾根を挟んで概ね東西に広がっている。尾根付近の73~91ライン、その西側61~73ラインそして東側91~106ラインの勾配は、それぞれ、100~400%、30~200%そして70~200%である。500mほど西には、十川の支流の一つ前田野目川が南南西(派立付近からは西南西)へ流れている。南西500m程のところには、本遺跡に係る谷を利用した沢溜池が水を湛えている。本遺跡はもとよりりんご畑であり、この辺一帯の平地~緩斜面には、りんご畑が広がっている。なお、調査区域東端の浪岡町との境界以東には、杉、松等の針葉樹が広がる。

本遺跡からは、西南西に標高1625mの岩木山山頂を、西南に白神山地等県境の山々を見ることができ、外は、尾根や、それに根を張る杉林・松林等の針葉樹のため、展望は望めない。

水野・堀田(1983)は、本遺跡に係る5万分の1図幅「青森西部」地域において、津軽平野と大釈迦丘陵の間に分布する、海成段丘を中心とした砂礫台地を前田野目台地と呼び、標高・傾斜・開析状態・構成物等をもとに、Gt I面・Gt II面・Gt III面の3段に細分している。図3はその地形分類図である。Gt I面(上位面)は標高50~70mで、大釈迦丘陵の縁辺に分布し、表面は浸食により波状を呈する。Gt II面(中位面)は標高30~40m、地形面は平坦で、寺屋敷平・羽野木沢周辺で広く、開析谷には多くの溜池が見られる。Gt III面(下位面)は標高20~30mで、Gt II面の前面に断片的に分布する。本遺跡の尾根部分は大釈迦丘陵に、その両翼はGt II面に位置する。

吾妻(1995)は、津軽半島に分布する地形面を、その分布形態と高度により、I面~V面の5段の段丘と沖積面に区分している。このうち、海成段丘は、高位よりI m面・III m面・V m面の3段である。III m面・V m面は、それぞれ小貫ほか(1963)の山田野段丘・出来島段丘に相当する。本遺跡西方約1.3kmに位置する隠川(12)遺跡付近(発掘調査は平成8年)より、その西北西隈無(2)遺跡まで分布する、水野・堀田(1983)のGt II面は、I m面に相当するが、本遺跡付近については、海成段丘の存在を認めていない。なお、中川(1972)は、県下の段丘を、最高位、高位、中位、低位の4群に大別し、山田野段丘を中位段丘としている。山田野段丘は、岩木川と日本海岸に挟まれた地域および岩木川東岸に主に分布し、面はほぼ水平、高さは15~20mである。中位段丘は、下北では田名部段丘、県南東部では高館段丘で、県下の海岸地域に最も普遍的に分布し、古くは海岸平野であったとみられている。

吾妻(1995)は、I m面について、砂・シルトを構成層とし、III m面との間に他の海成層がないことから、最終間氷期よりも1つ前の間氷期(約20~22万年前)に形成されたと考えるが、より古い可能性もあるとしている。箕浦・中谷(1990)も山田野段丘の形成時期は最終間氷期と推定できるとしており、整合性を持つ。最終間氷期は、欧州ではリス・ウルム間氷期、その1つ前はミンデル・リス間氷期と呼ばれている。

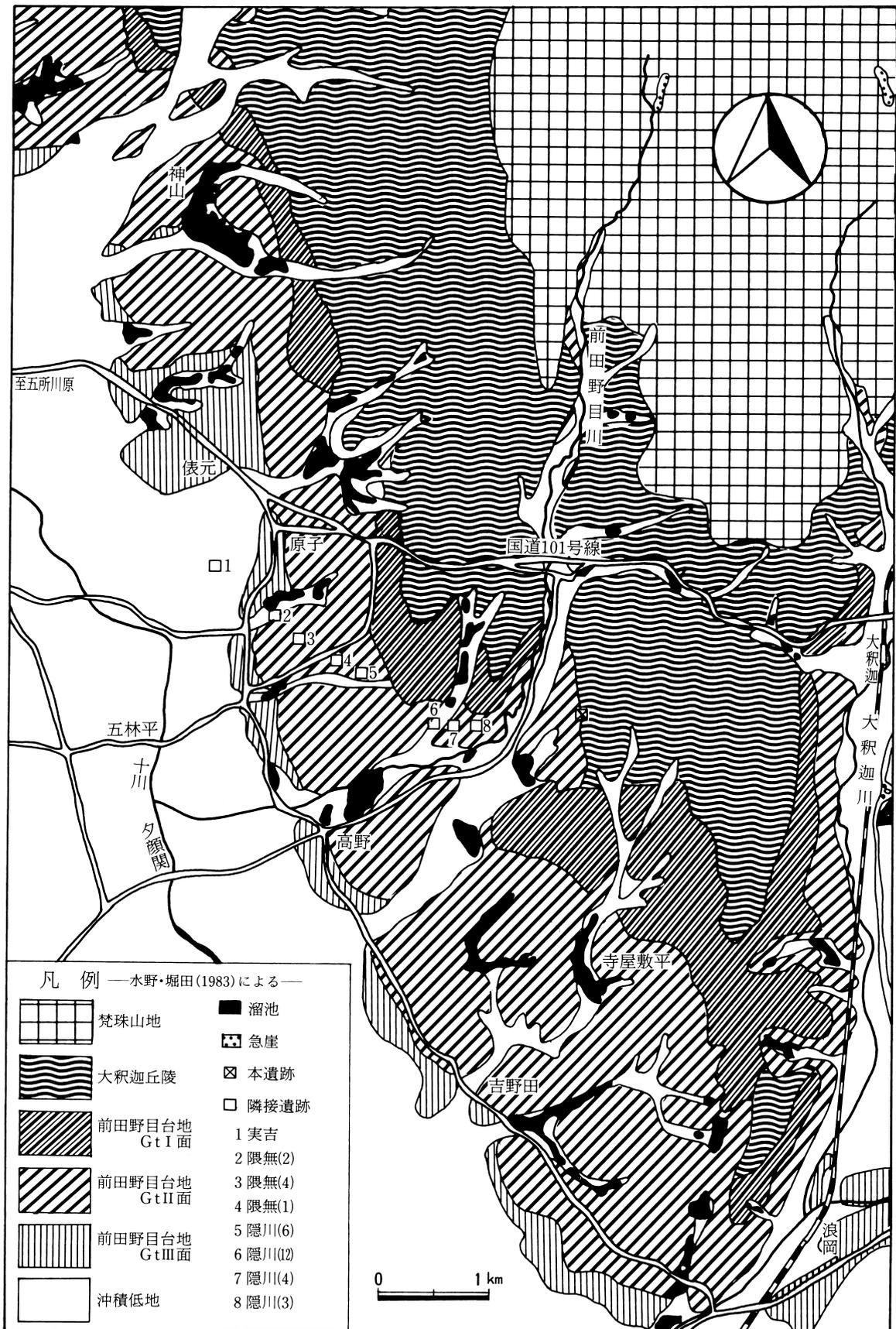


図3 五所川原市七和地域の地形分類図

第2節 周辺の地質及び遺跡の土層

本遺跡を含む津軽山地南部の地質構造は、馬ノ神山ドームに大きく影響されている。従って、堆積岩では馬ノ神山付近に見られる新第三系中新統の長根層が最も古く、ここから周囲へ離れるにつれ、順次新しい新生界が出現する。すなわち、中新統の馬ノ神山層・原八森層・不動の滝層・大滝沢層、鮮新統の大釈迦層・鶴ヶ坂層、そして更新統の前田野目層である。なお、馬ノ神山ドームの東半3分の1ほどは、津軽山地分水嶺のすぐ東側にあつて、それとほぼ並行して延びる津軽断層によって切られており、ここでは中新統は最上部の大滝沢層に限られ、ほとんどは鮮新世以降の新しい地層が堆積している。岩佐（1962）によれば、津軽断層は、三厩湾より大釈迦に抜ける延長約50kmの衝状性逆断層で、その最大落差は津軽山地中央部付近で1000mにも及ぶという。

本遺跡の基盤層は、分布が前田野目台地のそれと概ね重なる前田野目層である。本層の模式地は前田野目川下流一帯で、岩井（1965）によれば、模式地付近では鶴ヶ坂層を不整合に覆い、灰色の浮石質砂岩、青灰色シルト岩および細円礫等からなり、最上部は黄褐色の浮石質火山灰および同色のローム質粘土よりなるという。シルト岩層中には泥炭の薄層（30～50cm）を2枚狭在している。全体的に津軽盆地の中心に向かって3°前後の傾斜をなしているが、最下部のものは局部的だが、10～5°傾斜しているものも見られるという。

本遺跡周辺に分布する、前田野目層以外の新生界の層相等は下の通りである（岩井、1965；北村・岩井・多田、1972；岩井・沢田・大久保、1983）。

沖積低地堆積物（泥・砂）……………十川・浪岡川等によって供給された泥や砂で、津軽平野を構成する洪積統である。

沖積低地堆積物（砂・礫）……………前田野目川・大釈迦川等、津軽山地の山間部を流れる小河川によって供給された砂や礫で、それら小河川沿いの谷底平野や前田野目台地周縁の津軽平野を構成する沖積統である。

段丘堆積物……………細～中円礫で、前田野目台地のGtIII面を構成する洪積統である。

鶴ヶ坂層……………中礫大の浮石を含んだ、淡灰色～紫灰色の浮石質～砂質凝灰岩である。全体的に塊状無層理で、主に火山砕屑流によって形成された鮮新統である。なお、村岡・高倉（1988）は、八甲田カルデラの形成に伴って噴出した2つの主な火砕流堆積物のうち、古い方を八甲田第1期とし、従来、鶴ヶ坂層と呼ばれた海底火砕流堆積物に対比し、その形成年代を、K-Ar法より65万年前の洪新世としている。岩井（1965）も、本層からは化石が発見されず、時代決定は困難で、下位の大釈迦層と同じ構造運動に支配されることから、一応第三系として取り扱っているに過ぎない。

大釈迦層……………主として中～粗粒砂岩からなり、細円礫岩及びシルト岩をしばしば狭在する。一般に下部はシルト岩が、上部では砂岩が優勢である。本層には軟体動物や有孔虫等の浅海性海棲動物化石が豊富に含まれ、大釈迦動物化石群として一般に知られている。鮮新統である。

大滝沢層……………主として灰白色～白色の浮石質～砂質凝灰岩からなり、中新統である。

不動の滝層……………主として塊状～微層理を示す暗灰色珪藻土質シルト岩からなり、前田野目川流域では葉理を示す細粒砂岩の斑点を含む。全体的に貧化石帯となっているが、珪質海綿のサガリテスがほとんど全ての部分に含まれていることから、中新統である。サガリテスは日本の中新統上部、特

に油田地域の泥岩中に多産する。

源八森層……………板状層理を示す黒色頁岩からなり、下位の馬ノ神山層より漸移する。サガリテスを普遍的に含む中新統である。

馬ノ神山層……………主として、硬質頁岩・縞状頁岩からなり、層厚変化の著しい凝灰岩（太田凝灰岩部層）を狭在する。この部層は、淡青緑色～白色ベントナイト質細粒～火山礫凝灰岩からなり、泥岩を挟む。サガリテスを含む中新統である。

長根層……………馬ノ神山山頂一帯に分布し、淡緑色～灰褐色凝灰質砂岩・凝灰角礫岩からなる。流紋岩の熔岩を狭在する中新統である。

前田野目層・鶴ヶ坂層及び大釈迦層は、国道101号線沿い二ツ谷東方のメイプルビレッジ（有）北の露頭において、詳細に観察することができる。ここでは、大釈迦層がみかけ上西に30度前後傾斜しており、この上に塊状無層理を呈する鶴ヶ坂層が不整合に重なっている。鶴ヶ坂層の上には前田野目層がほぼ水平な層理を有して重なり、層厚は数メートルで、この上にローム層を載せている。

桜ヶ峰（2）遺跡では、比高が12mにも及ぶため平地のような一元的な堆積は見られない。ここでは、担当者が連続した極めて詳細な土層観察を、東西1ライン、南北3ラインの計4ラインについて行っている。東西は、Fライン67～91、南北は、80ラインE～M、85ラインE～F及び102ラインH～Mである。これらを総合した基本土層の詳細は下の通りである。図4は、各ラインの土層実測図から抽出したものである。東西は、尾根部で最も高いFライン82～85、南北は、尾根部の80ラインJ～M、調査区域東端102ラインH～Jである。

- | | | | |
|---------|----------|-------------|---------------------------------------|
| I 層 | 黒褐色土 | 10YR 2/3 | 表土・耕作土。しまりあり。粘性なし。草根多量混入。 |
| II 層 | 黒色土 | 10YR 2/1 | しまりあり。粘性なし。乾くとクラック発達。 |
| III a 層 | 黒褐色土 | 10YR 2/3 | しまりあり。粘性なし。白頭山苦小牧火山灰（B-Tm）とみられる火山灰混入。 |
| III b 層 | 暗褐色土 | 10YR 3/4 | しまりあり。粘性ややあり。 |
| III c 層 | 褐色土 | 10YR 4/4 | しまり・粘性ややあり。 |
| IV a 層 | 黒褐色土 | 10YR 2/2 | しまりあり。粘性なし。 |
| IV b 層 | 黒色土 | 10YR 1.7/1 | しまりあり。粘性ややあり。混入物ほとんどなし。 |
| IV c 層 | 黒色土 | 7.5YR 1.7/1 | しまりかなりあり。粘性あり。乾くとクラック発達。 |
| V 層 | 褐色土 | 10YR 4/6 | しまり・粘性あり。漸移層。 |
| VI 層 | 黄褐色ローム | 10YR 5/6 | 明黄褐色浮石・火山礫含む。しまり、粘性あり。 |
| VII a 層 | 鈍黄褐色ローム | 10YR 6/4 | 粘土質。しまり非常にあり。粘性あり。 |
| VII b 層 | 橙色砂質ローム | | |
| VIII 層 | 明黄褐色ローム | 10YR 7/6 | 細粒～中粒砂質・粘土質ロームの互層。しまりかなりあり。粘性なし。 |
| IX a 層 | 浅黄色砂質粘土 | 2.5Y 7/6 | マンガンを粒状に含む。 |
| X 層 | 黄褐色砂質シルト | | 軟。しまりあり。粘性なし。 |
| X I 層 | 青色粘土 | | 粘性あり。しまり非常にあり。 |

吾妻（1995）は、I m面には、上より黄褐色軽石質火山灰・褐色ローム・暗褐色シルト質火山灰（以

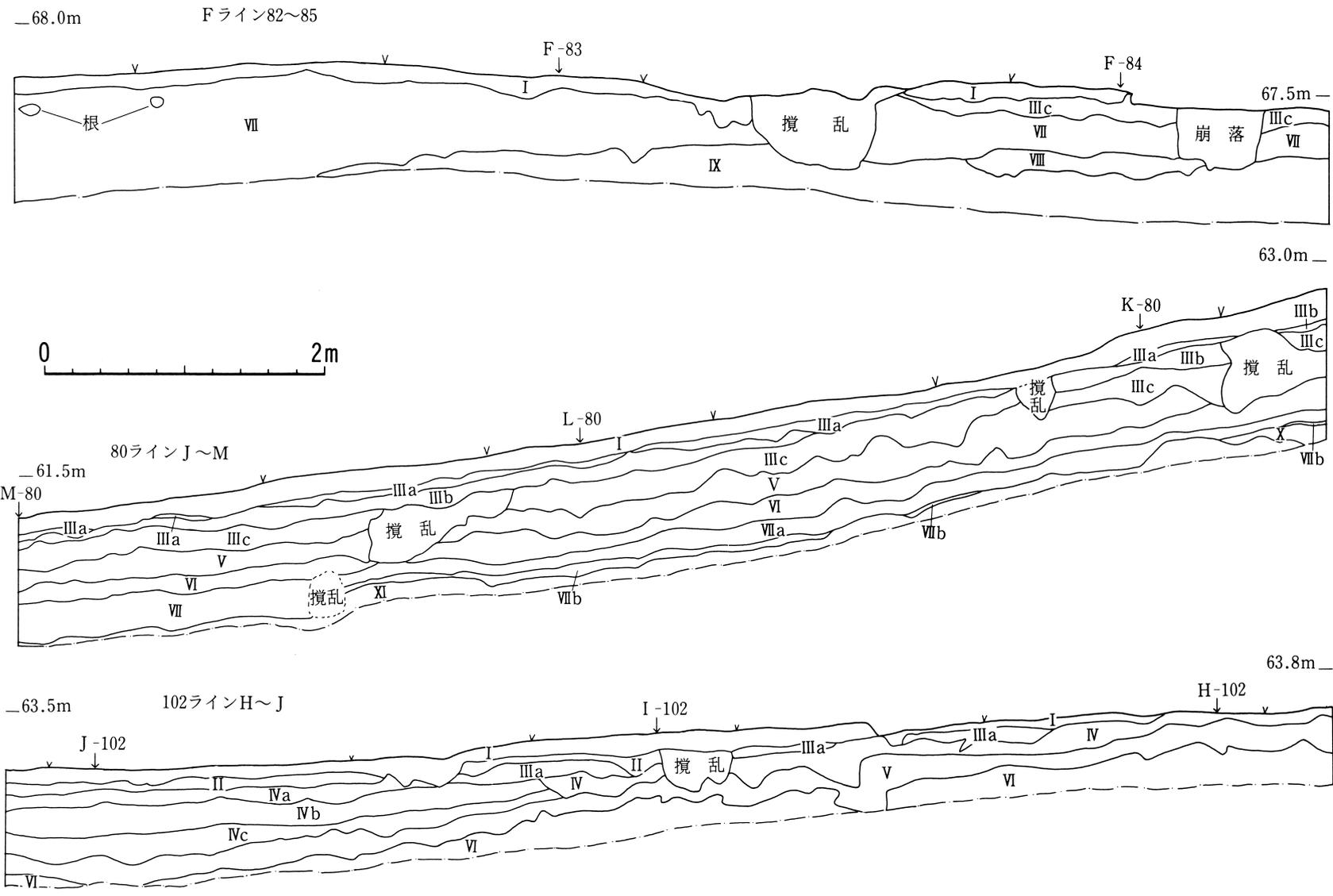


図4 桜ヶ峰(2)遺跡内土層実測図

上上部火山灰)、洞爺火山灰 (Toya) および下部火山灰の 5 層が模式的に載るとしている。このうち、津軽半島南部によく分布する黄褐色軽石質火山灰は、火山ガラスの屈折率から十和田八戸テフラ (To-HP) に対比される可能性が大きいという。Yo-HP は、いわゆる八戸火山灰であり、その降下年代は 12000~13000 年前である。また、上部火山灰と下部火山灰を区切る、白色で細粒の Toya は、北海道の洞爺湖を給源とする広域火山灰で、層厚は 20cm 前後である。町田・新井 (1992) は、Toya の噴出年代を 10~13 万年前としている。

本遺跡一帯は 1 m 面より高い位置にあることから、それら 5 層の火山灰等を基本的に載せていることになる。VI 層は、直径 2 cm ほどの浮石を少量含み、To-HP に対比されるとみられる。VII・VIII 層については褐色ローム以下に対比されようが、詳細は不明である。IX~X I 層は、層相から基盤の前田野目層とみられる。尾根部分ではローム等は薄い、谷部分では尾根からの堆積物の流れ込みもあって、厚く複雑である。 (伊藤 昭雄)

引用・参考文献

- 岩佐三郎 (1962) 青森県津軽地方の含油第三系とその構造発達史について。石油技術協会誌、27、197-231。
- 小貫義男・三位秀夫・島田昱郎・竹内貞子・石田琢二・斉藤常正 (1963) 青森県津軽十三湖地域の沖積層。東北大地質古生物研報、58、P. 1-36。
- 岩井武彦 (1965) 青森県津軽盆地周辺に発達する新生界の地質学的並びに古生物学的研究。弘大教育学部紀要、14、P. 85-155。
- 北村信・岩井武彦・多田元彦 (1972) 青森県の第三系。青森県の地質、P. 5-70、青森県。
- 青森県農林部土地改良第一課 (1983) 土地分類基本調査「青森西部」。
- 日本の地質『東北地方』編集委員会 (1989) 日本の地質 2 東北地方。共立出版、338 P。
- 須崎俊秋・箕浦幸治 (1992) 青森地域上部新生界の層序と古地理。地質学論集、37、P. 25-37。
- 中川久夫 (1972) 青森県の第四系。青森県の地質、P. 71-120、青森県。
- 梅津正倫 (1976) 津軽平野の沖積世における地形発達史。地理学評論、49、P. 714-735。
- 角田清美 (1978) 津軽屏風山砂丘地帯の地形について。東北地理、30、P. 15-23。
- 村岡洋文・高倉伸一 (1988) 10万分の 1 八甲田地熱地域地質図説明書。特殊地質図 (21-4)、地質調査所、27P。
- 箕浦幸治・中谷 周 (1990) 津軽十三湖及び周辺湖沼の成り立ち。地質学論集、36、P. 71-87。
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラスー日本列島とその周辺。東大出版会、210P。
- 梅津正倫 (1994) 沖積低地の古環境学。古今書院、270P。
- 吾妻 崇 (1995) 変動地形からみた津軽半島の地形発達史。第四紀研究、34、P. 75-89。
- 日本第四紀学会第四紀露頭集委員会 (1996) 第四紀露頭集ー日本のテフラ。日本第四紀学会、352P

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、土坑5基、焼土状遺構14基、道跡3条が検出された。出土遺物は、第2号土坑から縄文時代の遺物が数片出土したのみである。以下、各遺構について概要を記述する。

第1節 土坑

第1号土坑 (図5)

[位置] J-80グリッドに位置する。斜面中腹で確認した。

[形態・規模] 平面形は不整形で、断面形は船底形を呈する。規模は上端で1.25m×1.16m、最深部の深さは0.26mである。

[堆積土] 4層に分層した。底面は所々焼土化しており、最下層からは炭化物の層を検出した。また、埋土に火山灰(白頭山火山灰か)の堆積が見られた。自然堆積である。

[遺物] なし。

[その他] 平安時代前半の焼き火あとか。

第2号土坑 (図5)

[位置] K-100グリッドに位置する。谷地形の凹部分で検出した。

[形態・規模] 平面形は円形で、断面形は船底形を呈する。上端で0.98m、最深部で0.28mである。

[堆積土] 3層に分層した。自然堆積であるが谷地形部分を満たすIV層とほぼ同じ土質であった。

[遺物] 床面直上で、縄文時代晩期初頭の土器片数片が出土した。

[その他] 床面直上より出土した土器片と、土坑周辺より出土した遺構外の土器片が接合して1個体の浅鉢形土器となった。土坑周辺は緩やかな谷地形の谷部分になっており、土坑内の土器片も流れ込みによるものである可能性が高く、土坑の廃棄時期の決め手にはならない。

第3号土坑 (図6)

[位置] F・G-95グリッドに位置する。

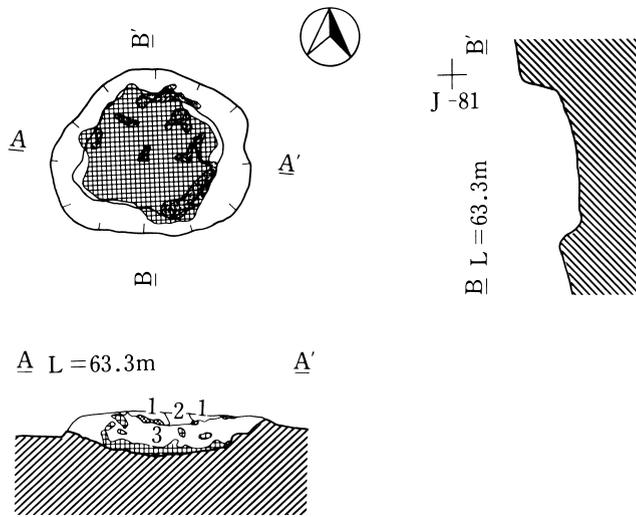
[形態・規模] 平面形は不整形で断面形は皿形を呈する。規模は上端で2.30m×1.55m、最深部の深さは0.27mである。

[重複] 風倒木による窪みに存在する。

[堆積土] 3層に分層した。最下層には炭化材が多く含まれており、火山灰(白頭山火山灰か)がそれを覆っていた。その上は自然堆積である。

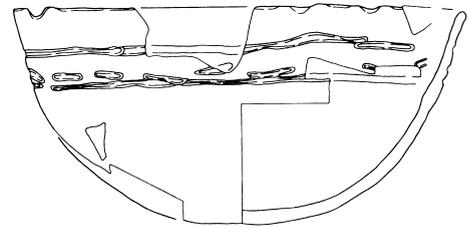
[遺物] なし。

[その他] 平安時代の前半に、風倒木による自然の窪みを利用して焼き火を行った跡か。

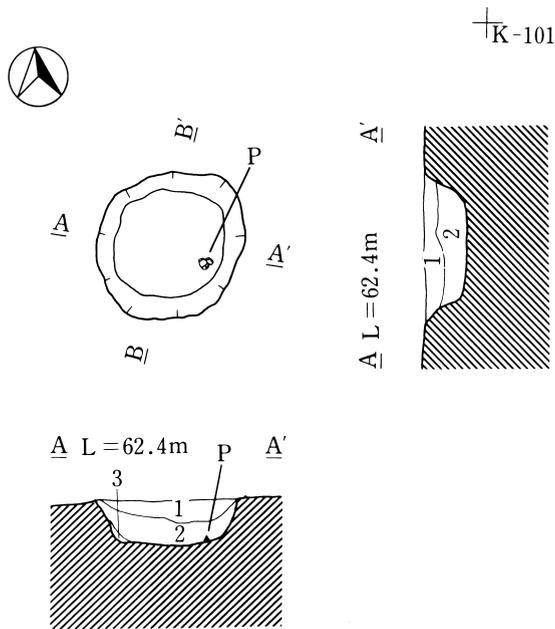


第1号土坑堆積土

- | | | | |
|-----|---------|------|------------|
| 第1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | しまりあまり無し |
| 第2層 | | | 白頭山火山灰ブロック |
| 第3層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | しまりあまり無し |

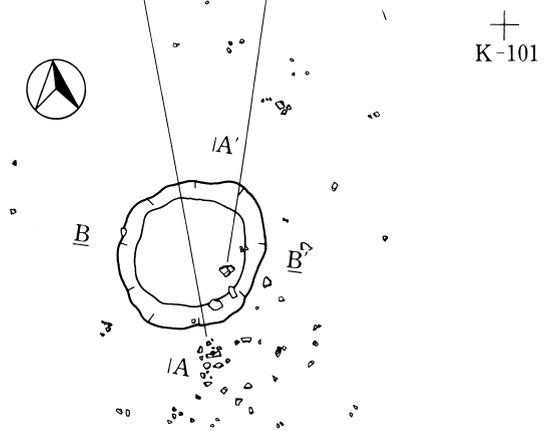


0 5cm



第2号土坑堆積土

- | | | | |
|-----|-----------|-----|---------------|
| 第1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | しまり・湿性有 |
| 第2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | しまりやや有、粘性・湿性有 |
| 第3層 | | | 崩落土 |



第2号土坑土器出土状況

S = 1/50 0 2m

図5 第1号・第2号土坑

第4号土坑 (図6)

[位置] J-98・99グリッドに位置する。IIIb層上面で確認した。

[形態・規模] 平面形は小判形、断面形は船底形を呈する。規模は、上端で1.65m×1.44m、深さ0.30mである。

[堆積土] 底面はかなり焼土化しており、最下層から炭化物の層を検出した。また、埋土に火山灰(白頭山火山灰か)の堆積が見られた。自然堆積である。

[遺物] なし。

[その他] 平安時代前半の焼き火の跡か。

第5号土坑 (図6)

[位置] L-87グリッドに位置する。IIIc層上面で確認した。

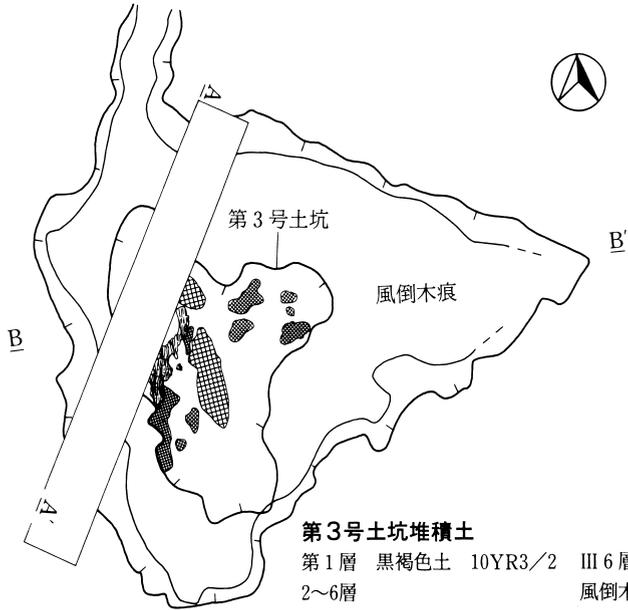
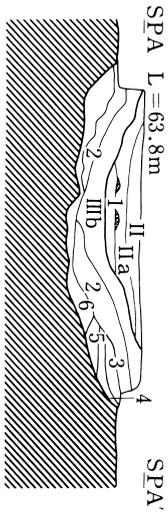
[形態・規模] 平面形は不整形、断面形は皿形を呈する。規模は、上端で0.72m×0.7m、最深部の深さは0.12mである。

[堆積土] 床面直上で炭化物を多く含む層を検出した。

[遺物] なし。

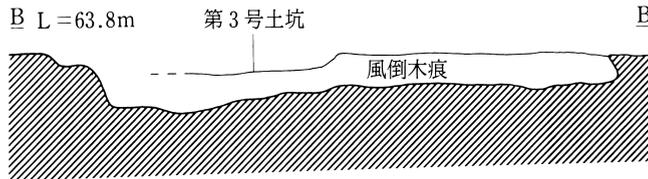
[その他] 掘り込みも浅いため、自然の窪地で一時的に火を焚いた跡かもしれない。出土遺物、鍵層となる火山灰が無い場合時期は不明である。

第3号土坑



第3号土坑堆積土

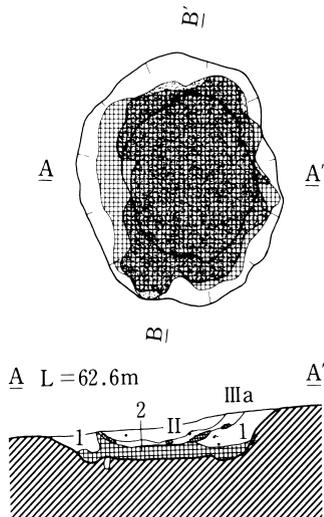
第1層 黒褐色土 10YR3/2 III 6層土主体。炭化物を多量混入。
2~6層 風倒木痕



+

G-97

第4号土坑



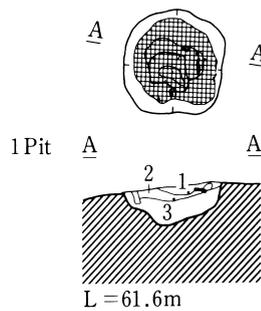
第4号土坑堆積土

第1層 黒褐色土 10YR2/2 しまり有。炭化物少量混入。IIIb層類似。
第2層 黒色土 10YR2/1 しまり無。炭化物主体の層。床面が焼土化（明赤褐色土）。

第5号土坑

+

L-87



第5号土坑堆積土

第1層 黒色土 10YR1.7/1 しまりなし。炭化物を多量混入。
第2層 黒邪土 10YR2/1 しまりなし。炭化物を多量混入。
第3層 褐色土 10YR4/4 しまりなし。IIIc層と類似。

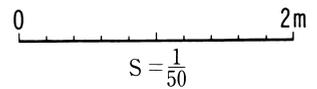


図6 第3号・第4号土坑

第2節 焼土状遺構

14基の焼土状遺構を検出した。規模等については下表に一覧表として載せた。

焼土状遺構一覧表

No.	位 置	長軸×短軸×厚さ (cm)	平 面 形
1	L-96	448×246×16	不整形
2	L-97・98	590×207×16	不整形
3	L-97	112×66×6	不整形
4	L-98	164×91×11	不整形
5	L-99	176×60	不整楕円
6	L-99	165×130×16	不整形
7	K-99	115×108×19	不整円
8	L-100	114×64×8	不整楕円
9	K-100	131×72×24	不整楕円
10	F-67	159×75×26	不整形
11	F-67	64×30×32	不整形
12	F-67	280×183×16	不整形
13	J-101	227×136×24	不整形
14	J-102	452×178×27	不整形

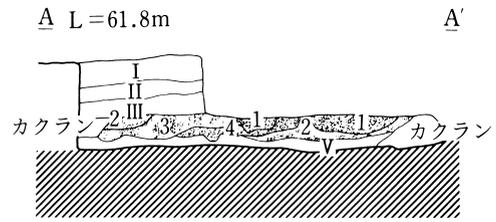
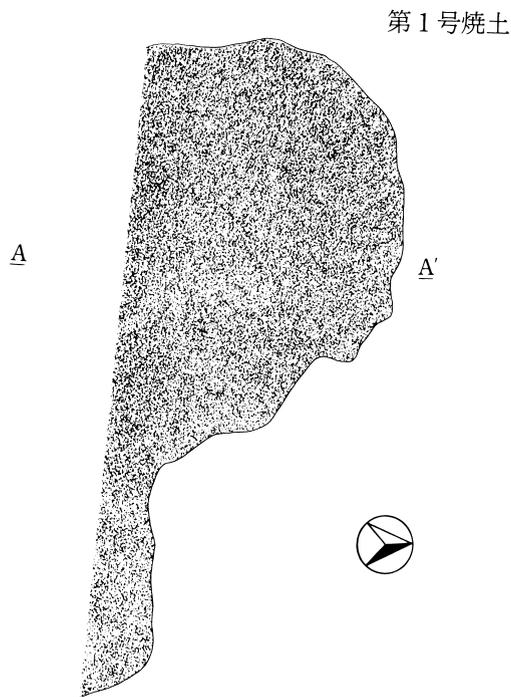
〔小結〕 焼土状遺構は、緩やかな谷地形の谷部分に並ぶように分布する。また、焼土状遺構が確認された土層は全てIV層（黒色土）の下位である。焼土の堆積状況は、中位に暗赤褐色土の層が形成され、その上下に、IV層の黒色土と混ざった極暗褐色土の層が水に流されたような状態で広く形成されていた。尚、焼土層からは遺物は検出されなかった。

以上のような状況から、本遺跡における焼土状遺構は、何らかの理由で焼土化した土壌が水の影響を受けて二次堆積したものと考えられる。□ □ □ □ □ (赤羽 真由美)

第3節 近代の道跡

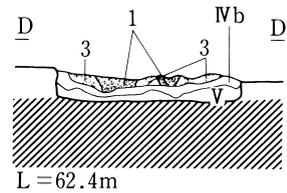
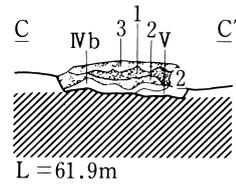
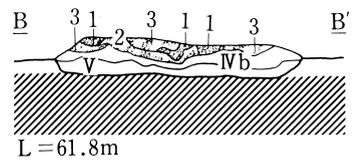
表土を排除した状態で、道路状の硬く踏みしまった範囲（以下、硬化面と表記する）を検出した。第2号及び第3号道跡では断続的な1条の硬化面を検出した。硬化面の最大幅は約50cm、最小幅は約20cmである。また、第2号道跡の全長は11.4m、第3号道跡の全長は7mである。第1号道跡に比べると硬化が緩く、あぜ道状である。第1号道跡は轍を形成しており、J-71グリッド付近で二又に分かれる。一方は調査区東側の農道方面へ、もう一方は第3号道跡方面へ向かうものと思われる。硬化面の最大幅は分岐点で約3.1m、最小幅は20cmある。硬化面上には蹄鉄が残されていた。第1号道跡では、等間隔の硬化面が2条走っていることから、馬に荷車を引かせて通行した道の跡とも考えられる。蹄鉄が一般に普及するのは明治時代以降なので、少なくともそれ以降の時期が想定される。

(赤羽 真由美)



第1号焼土

- 第1層 暗赤褐色土 5 YR3/6 黒褐色土との混合土。
- 第2層 黒褐色土 10YR2/3 暗赤褐色土との混合土。
- 第3層 黒褐色土 10YR2/2 極暗赤褐色土との混合土。
- 第4層 明赤褐色土 5 YR5/8 黒褐色土との混合土。

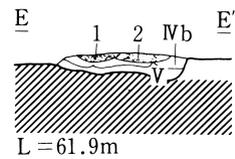


第2号焼土

- 第1層 暗赤褐色土 5 YR3/4 黒色土との混合土。しまり有。
- 第2層 黒褐色土 10YR2/2 暗赤褐色土との混合土。
- 第3層 極暗赤褐色土 5 YR2/3 暗赤褐色土との混合土。

+

L-98



第5号焼土

- 第1層 極暗赤褐色土 5 YR2/3 暗赤褐色土との混合土。
- 第2層 黒褐色土 10YR2/2 暗赤褐色土との混合土。

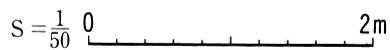


図7 第1号～第3号焼土

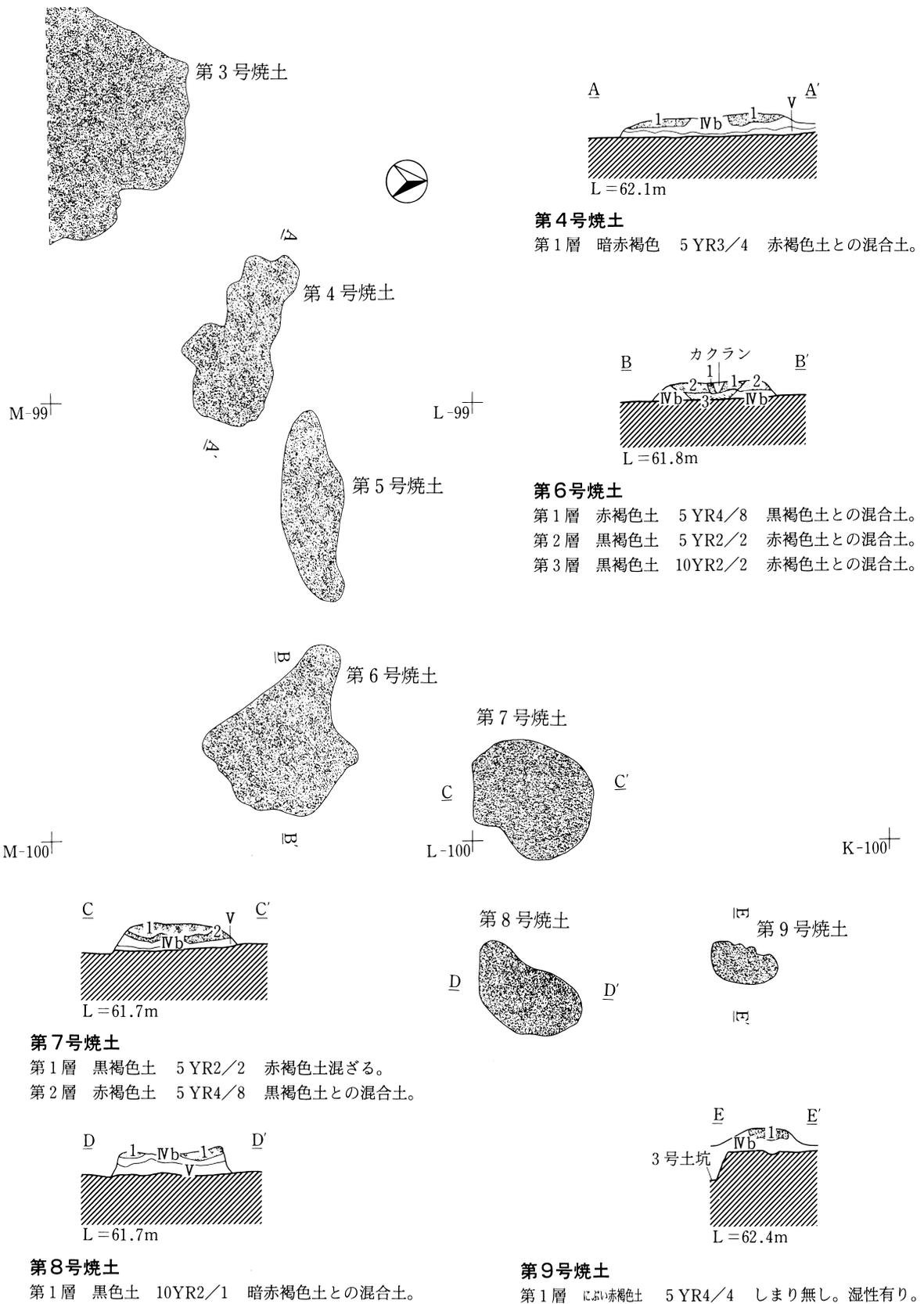
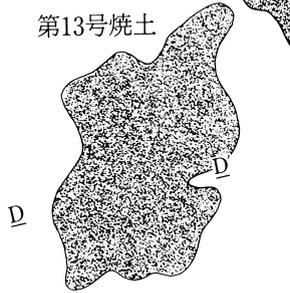


図8 第4号～第9号焼土

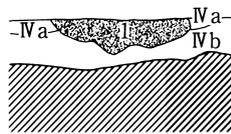
+



第13号焼土



D L=62.9m D'

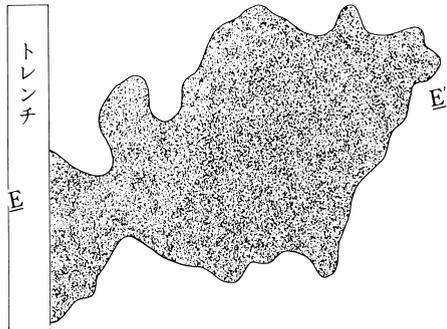


+ J-102

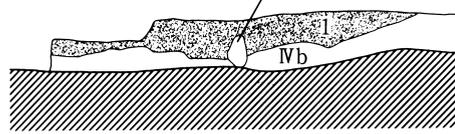
第14号焼土

+ J-103

トレンチ



E L=63.1m E'



第13号焼土

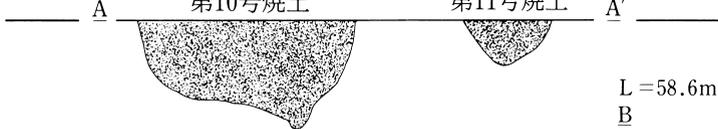
第1層 黒色土 7.5YR1.7/1 赤褐色土 (5 YR4/6) との混合土。

第14号焼土

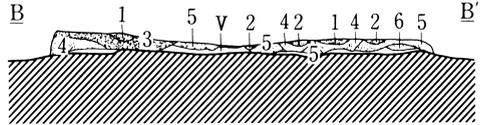
第1層 黒色土 7.5YR1.7/1 赤褐色土 (5 YR4/6) との混合土。

第10号焼土

第11号焼土

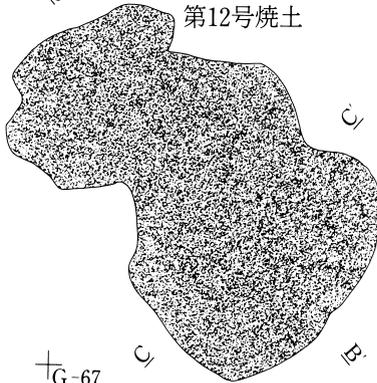


L=58.6m



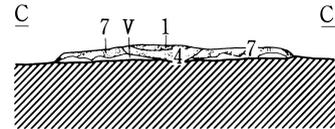
B

第12号焼土



+ G-67

L=58.6m



第12号焼土

第1層 暗赤褐色土 5 YR3/6 明赤褐色土と黒褐色土との混合土。

第2層 黒褐色土 5 YR2/2 明赤褐色土との混合土。

第3層 暗赤褐色土 5 YR2/4 明赤褐色土との混合土。

第4層 黒褐色土 10YR2/2 暗赤褐色土・黄褐色土との混合土。

第5層 黒褐色土 10YR2/3 暗赤褐色土・黄褐色土・黒色土との混合土。

第6層 黒褐色土 10YR2/3 黄褐色土・暗赤褐色土との混合土。

第7層 黒色土 10YR1.7/1 暗赤褐色土・黄褐色土との混合土。

第10・第11号焼土

第1層 暗褐色土 10YR3/4

第2層 暗赤褐色土 5 YR2/3 暗赤褐色土との混合土。

第3層 黒褐色土 10YR2/2

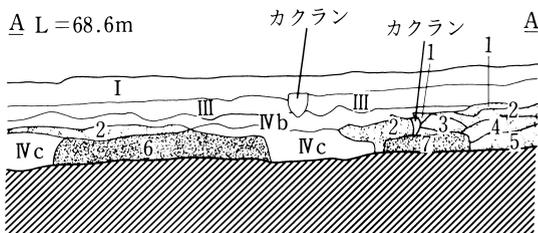
第4層 黒褐色土 10YR2/3 暗赤褐色土との混合土。炭化粒少量混入。

第5層 黒褐色土 10YR2/2 暗赤褐色土・黄褐色土との混合土。

第6層 暗赤褐色土 5 YR2/3 赤褐色土との混合土。しまり有。

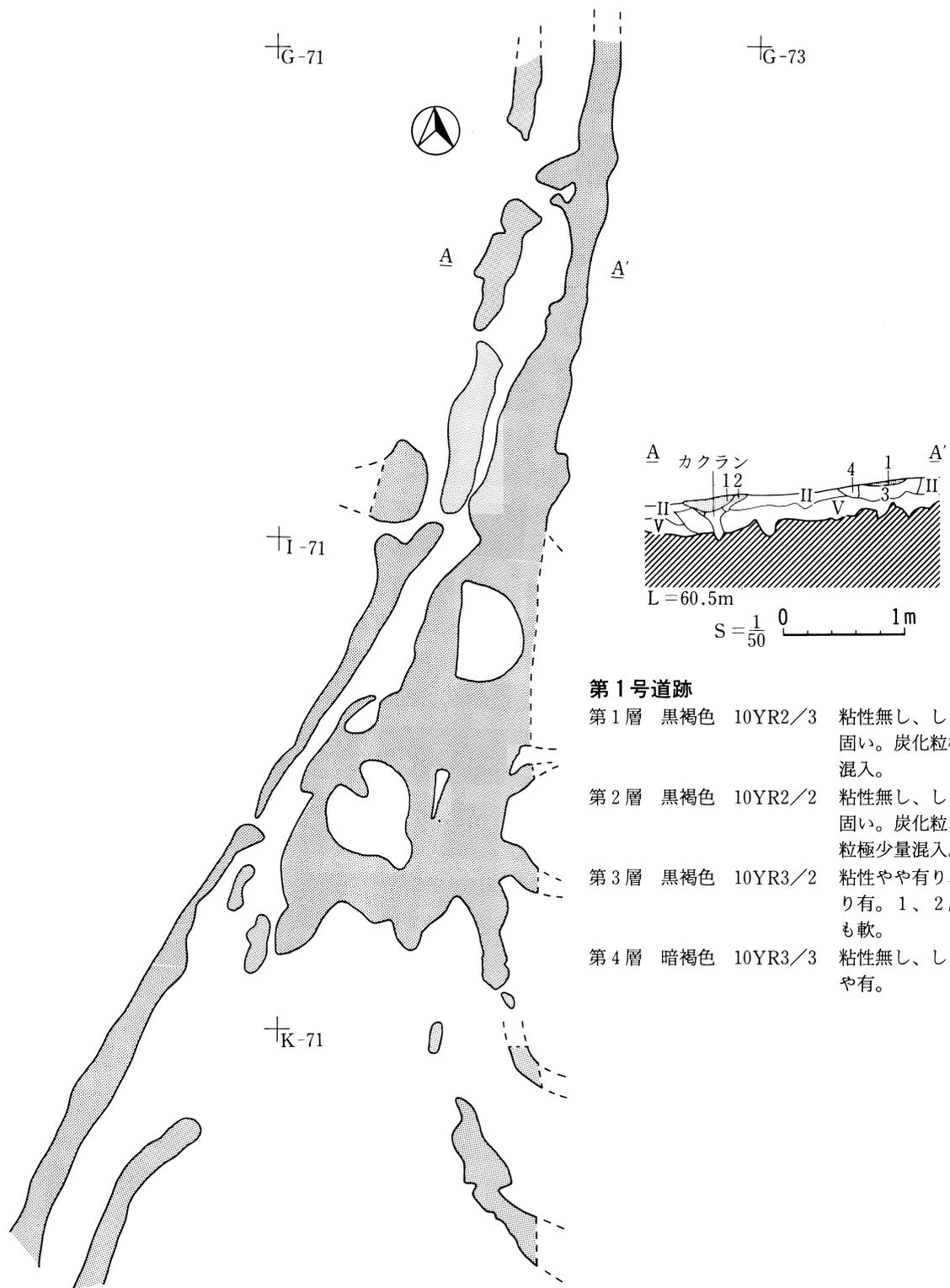
第7層 黒褐色土 5 YR2/2 明赤褐色土・黄褐色土との混合土。

A L=68.6m



S = 1/50 0 2m

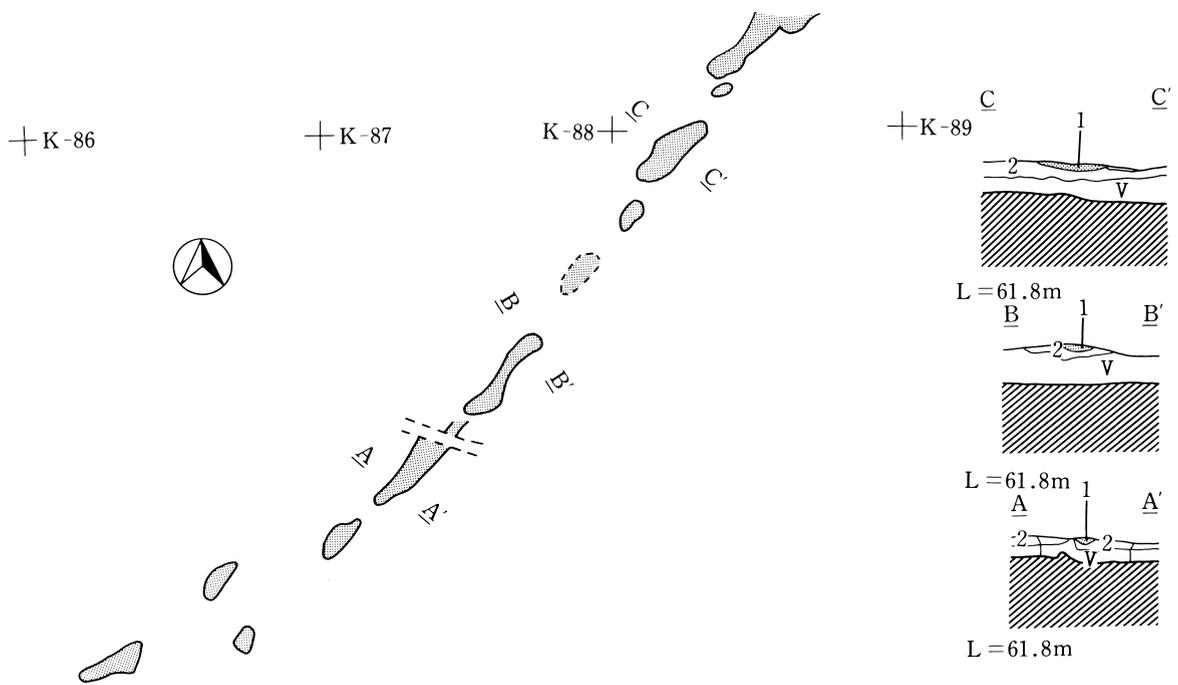
図9 第10号～第14号焼土



第1号道跡

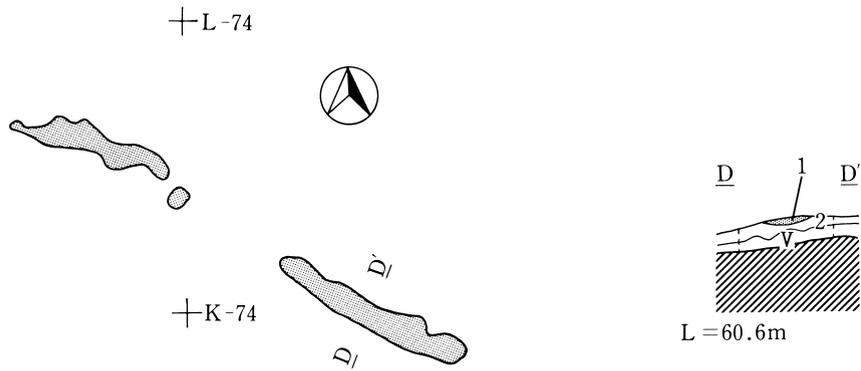
- | | | | |
|-----|-----|---------|---------------------------|
| 第1層 | 黒褐色 | 10YR2/3 | 粘性無し、しまって固い。炭化粒極少量混入。 |
| 第2層 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 粘性無し、しまって固い。炭化粒、焼土粒極少量混入。 |
| 第3層 | 黒褐色 | 10YR3/2 | 粘性やや有り、しまり有。1、2層よりも軟。 |
| 第4層 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 粘性無し、しまりやや有。 |

図10 第1号道跡



第2号道跡

- 第1層 黒褐色土 10YR3/2 粘性なし。しまって固い。砂分を含む。
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 粘性なし。しまりあり。III b層主体の風成層。道路跡下部分は固い。



第3号道跡

- 第1層 黒褐色 10YR2/3 粘性無し。しまって固い。
- 第2層 暗褐色 10YR3/3 粘性無し。しまりやや有。III層主体の風成層。

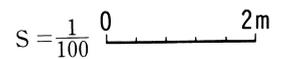


図11 第2号・第3号道跡

第IV章 遺構外の出土遺物

第1節 土器

本遺跡からは、縄文時代の土器が段ボール箱約4箱分、弥生時代・続縄文時代・平安時代の土器が少量出土した。しかし、数片の土器片を除いた全てが遺構外から出土した。以下、種類ごとに記述する。

第I群 縄文時代前期の土器（図12；1～9）

本群の土器は、段ボール1箱分出土した。調査区両端の緩やかな谷地形部分と、中央の斜面中腹部にややまとまって分布する。1～3は斜面中腹部から出土したものから抜粋した。ほとんど接合しないが2～3個体分あり、肉厚でもろい。底部は上げ底気味で縄文を持つ。円筒下層a式に位置づけられる。4～6は微隆帯を持つ。円筒下層b式頃に位置づけられよう。

第II群 縄文時代中期の土器（図12；10・11）

本群の土器は段ボール1／2箱分出土した。その多くは調査区東側の緩斜面のトレンチより出土した。縄文を施文した上に細めの隆帯を貼り付けている。円筒上層d式頃に位置づけられる。

第III群 縄文時代後期の土器（図12；12～18、図13；1・2）

本群の土器は段ボール1／2箱分出土した。16・17は同一個体で明赤褐色を呈する。十腰内I式前後に位置づけられよう。図13；1・2も同一個体である。

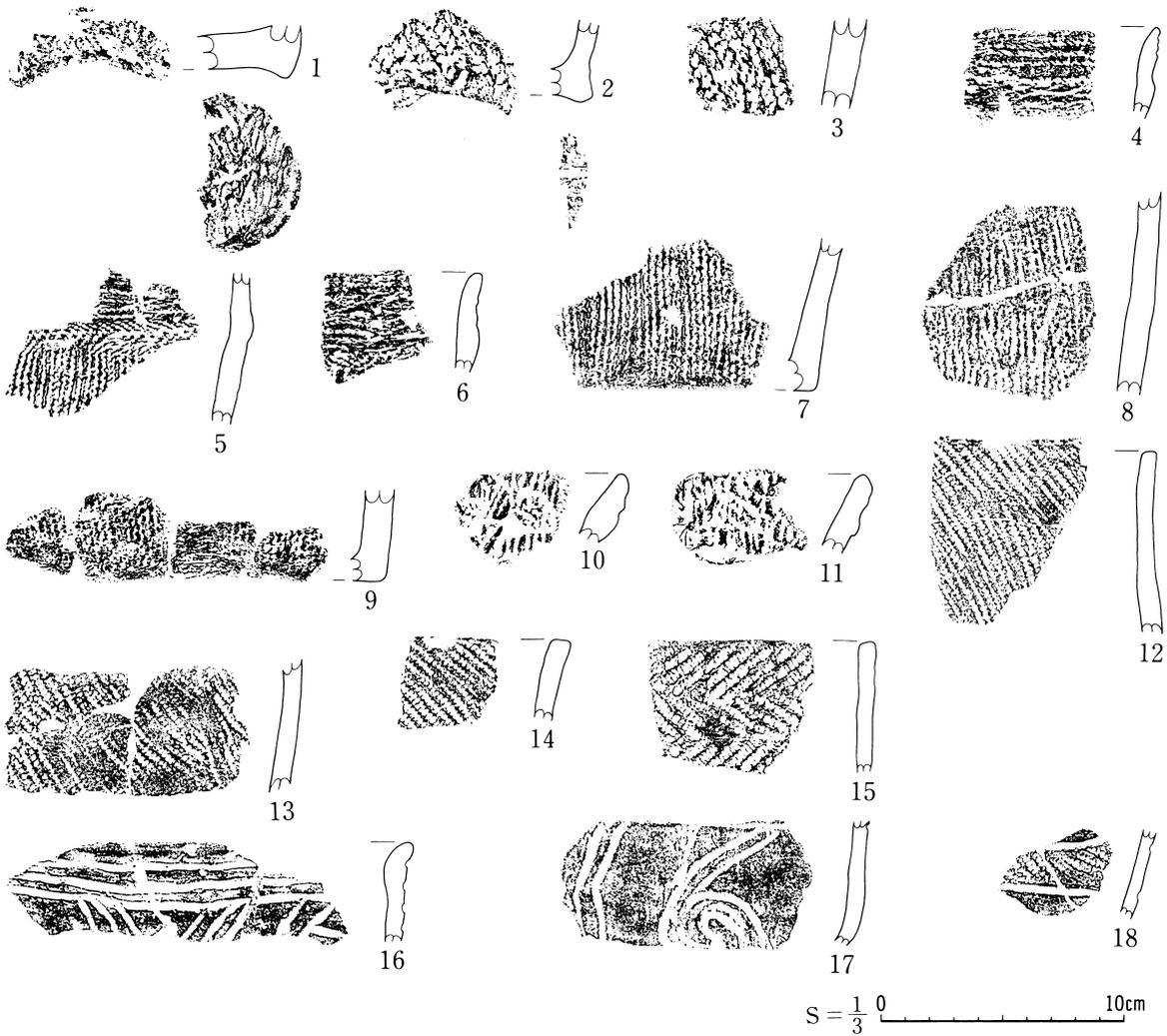
第IV群 縄文時代晩期の土器（図13；3～13）

本群の土器は段ボール1／2箱分出土した。3・4は同一個体である。緩やかな山形口縁の頂部から2本の弧状の沈線が伸びている。亀ヶ岡遺跡（1973・青森県教育委員会）に類例が見られる。大洞B式の古手であろうか。5～7も同一個体である。横走沈線が5条見られるが、口唇部内面には沈線が施されていない。口縁に連続するキザミが加えられ、小波状を呈しており、後期的な雰囲気を持つ。3・4に近接した時期のものと思われる。11は、調査区の東側、緩やかな谷地形の3号土坑付近から散らばって出土しており、2号土坑出土土器と接合したものである。

第V群 縄文時代後期～晩期の粗製土器（図13；14・15、図14；1～13）

本群の土器が最も多く出土した。ダンボール2箱分近い。11～13は条痕文土器である。図示したものは少ないが、本群のうち約半数は晩期の条痕文の深鉢形土器である。深鉢形土器と見られるものは、口径が25cm～40cm、器厚が4～6mmと大ぶりである。1・2・3・5は口縁部の作出方法でも共通点が多い。まず器表面に横方向のケズリを施し、口縁部に粘土を貼り付け、口唇部を平らに調整し、貼り付けた粘土を接着させるために両面をなで、最後に縄文を施文している。4・11・13も積極的に観察できないが同様の手法をとっている可能性が高い。9はそれらとは様相が違い、薄手で条も縦走し、色調は赤褐色を呈する。弥生時代の土器の可能性を持つ。

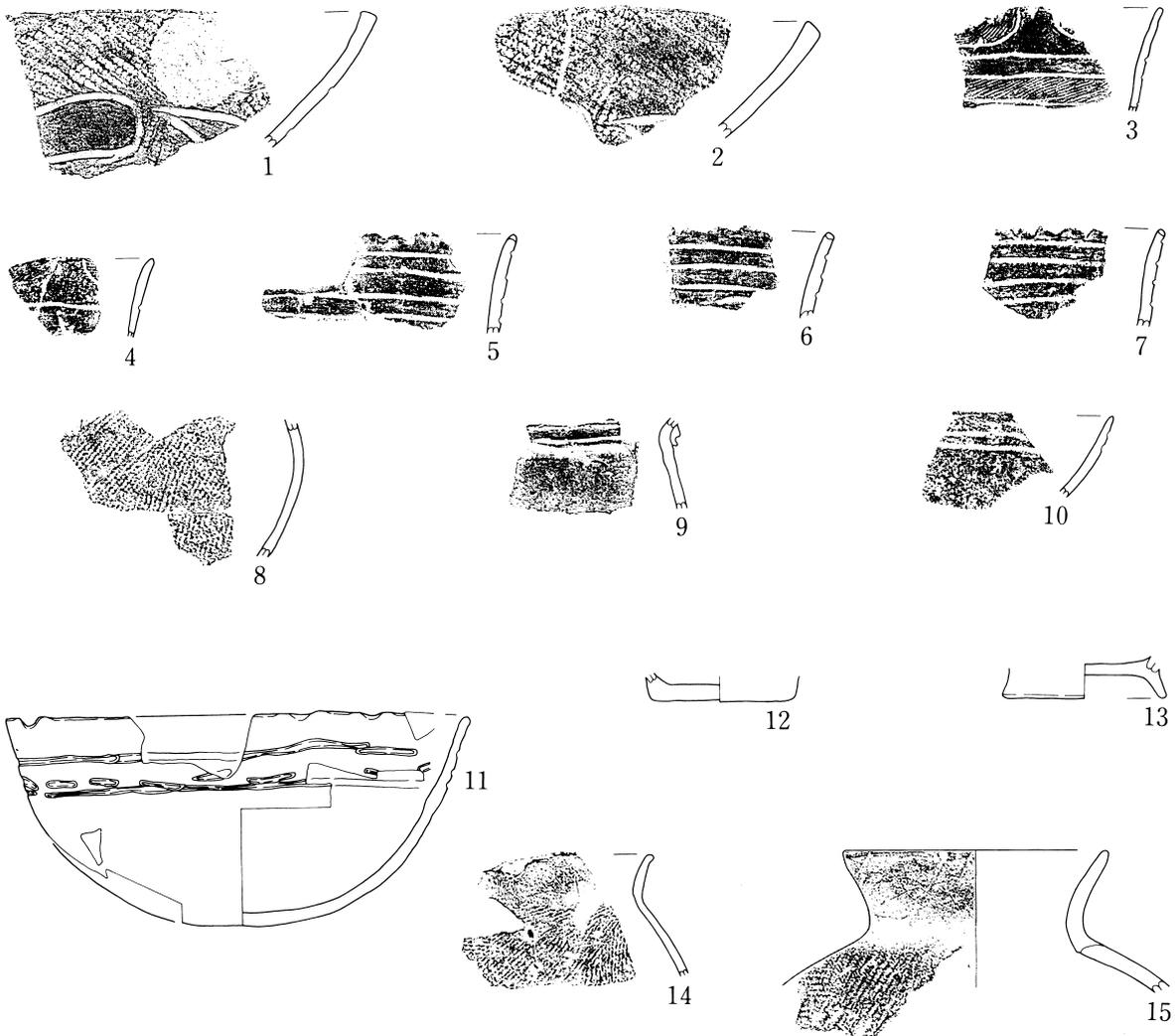
（赤羽 真由美）



土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器形	部位	文様特徴	備考	分類
12-1	H-83	III	深鉢	底部	底部RL?	繊維混入	I
2	I-90	III	深鉢	底部	胴部RLR(ヨコ)、底部RLR	繊維混入	I
3	G-83	III	深鉢	胴部	RLR(ヨコ)	繊維混入、1と同一個体	I
4	I-112	III	深鉢	口縁部	口縁部L側面圧痕		I
5	F-66	III	深鉢	口縁部	L側面圧痕、LR/RL羽状縄文(結束第一種)、L燃糸文		I
6	F-66	III	深鉢	口縁部	L側面圧痕、LR/RL羽状縄文(結束第一種)		I
7	H-65	III	深鉢	底部	LR燃糸文	海綿骨針含	I
8	H-65	III	深鉢	胴部	L燃糸文?	海綿骨針含	I
9	H-65	III	深鉢	底部	L燃糸文	海綿骨針含	I
10	I-112	III	深鉢	口縁部	LR→粘土紐貼付→L(0段多条)圧痕		II
11	I-112	III	深鉢	口縁部	RL(ヨコ)→粘土紐貼付→(0段多条)圧痕		II
12	G-69	III	深鉢	口縁部	RL(ヨコ・0段多条)	同一個体、海綿骨針含	III
13	G-69	III	深鉢	胴部	RL(ヨコ・0段多条)		III
14	G-69	III	深鉢	口縁部	RL(ヨコ・0段多条)		III
15	G-63	III	深鉢	口縁部	LR(ヨコ・0段多条)を羽状に施文	繊維混入	III
16	G-98	III	深鉢	口縁部	ミガキ→沈線文	海綿骨針含	III
17	G-98	III	深鉢	胴部	ミガキ→沈線文	海綿骨針含、16と同一個体	III
18	M-61	II	-	胴部	RL(ヨコ/0段多条)→沈線文→擦消		III

図12 遺構外の出土遺物(縄文土器その1)

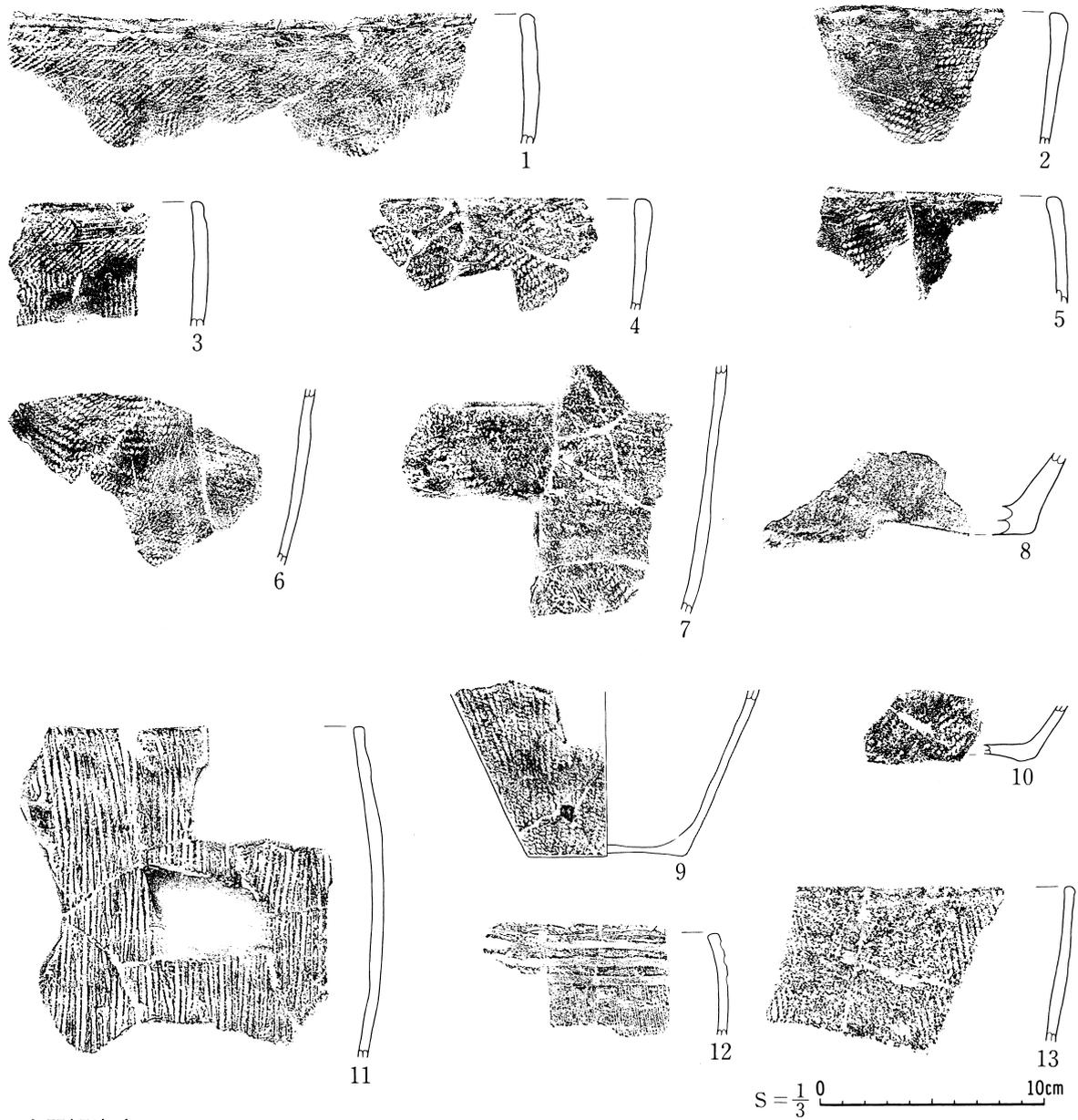


S = $\frac{1}{3}$ 0 10cm

土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器形	部位	文様特徴	備考	分類
13-1	M-62	II	浅鉢	口縁部	RL (ヨコ) → 沈線文 → 擦消	海綿骨針含、内面ミガキ	III
2	G-68	II	浅鉢	口縁部	RL (ヨコ) → 沈線文	2-1 と同一個体	III
3	J-70	V	台付鉢	口縁部	山形口縁、LR (ヨコ) → 沈線文 → 擦消		IV
4	J-70	III	台付鉢	口縁部	山形口縁、沈線文 → ミガキ	2-3 と同一個体	IV
5	G-93	IV	-	口縁部	小波状口縁、並行沈線 → ミガキ		IV
6	G-93	IV	-	口縁部	小波状口縁、並行沈線 → ミガキ		IV
7	G-93	IV	-	口縁部	小波状口縁、並行沈線 → ミガキ		IV
8	F-95	I	-	肩部	LR (ヨコ)	内面ミガキ	IV
9	K-100	IV	壺	口縁部	ミガキ、隆帯貼付け → 沈線	内面ミガキ	IV
10	K-100	IV	浅鉢	口縁部	LR (ヨコ?) 平行沈線	摩耗激しい	IV
11	K-100	IV	浅鉢	復元	平行沈線・押し引き列点 → ミガキ	2号土坑出土土器片と接合	IV
12	G-72	III	台付鉢	台部	無文		IV
13	I-62	II	-	底部	無文	海綿骨針含	IV?
14	G-91	III	粗製壺	口縁部	口縁部無文、胴部L (タテ・ヨコ)		V
15	H-71	I	粗製壺	口縁部	口縁部無文、胴部LR (タテ・ヨコ)		V

図13 遺構外の出土遺物（縄文土器その2）



土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器形	部位	文様特徴	備考	分類
14-1	L-110	I	深鉢	口縁部	口唇部粘土貼付→RL(ヨコ)、L(タテ)		V
2	L-110	I	深鉢	口縁部	口唇部粘土貼付→LR(ヨコ)、L(タテ)		V
3	H-70	I	深鉢	口縁部	口唇部粘土貼付→LR横走(0段多条)		V
4	H-71	III	深鉢	口縁部	LR(ヨコ)		V
5	H-71	III	深鉢	口縁部	口唇部粘土貼付→LR(ヨコ)	スス状炭化物付着	V
6	H-70	I	深鉢	胴部	LR(タテ)	スス状炭化物付着	V
7	H-70	I	深鉢	胴部	LR(タテ)	内外面にスス状炭化物付着	V
8	G-66	II	-	底部	無文		V
9	G-91	III	-	底部	RL縦走		V?
10	H-70	I	-	底部	胴部LR(ヨコ)、底部ナデ	底部上げ底気味	V
11	F-67	II	深鉢	口縁部	条痕文		V
12	F-74	III	深鉢	口縁部	条痕文→平行沈線		V
13	F-67	II	深鉢	口縁部	条痕文		V

図14 遺構外の出土遺物(縄文土器その3)

第VI群 弥生時代及び続縄文時代の土器（図15、図16）

弥生土器（図15；1～19）

70片出土した。ほとんどが胴部の細片であり全く接合しない。口縁部は1点のみであり、底部は出土しなかった。個体数は、地文縄文および胎土・焼成の状態より察して1個体と考えられるが、18と19の2片のみは別個体の可能性も否定できない。ここでは、拓影図に耐えうる19点を抽出し、報告する。

器種は甕と思われ、頸部が直立し口径の広い器形であると思われる。文様は、縄文と沈線が確認できる。器厚は4～5mmである。

地文縄文は、単節RLを縦走させた後、短軸絡条体（無節L）による捺糸文（綾繰状、矢羽状）を横位に施していると思われるが、確定できない（註）。縦走縄文の条間は2～3mm開き、その部分に縄文施文以前の横位調整（恐らくナデ）がかすかに観察される（9）。施文後の器面ミガキは認められない。

全体の文様構成は不明瞭であるが、一部に斜沈線（4・5）を組み合わせる数条の横走沈線（1～6）が見られる。沈線は縄文施文後に施されている。特に横走沈線は、口縁部直下から数cm下の頸部あたりにのみ施されているようである。沈線幅は約1.5～2mm、断面形は半円形で、深淺もなく均等である。

縄文は、数段巡らされる横走沈線の間にも若干観察できる（2～6）ものの、口縁部直下には施されていないようである（1）。ただし、口唇部にはかすかに施されている。胴部以下は、縄文のみの文様と想像され、沈線は一切確認されない。胎土には石英粒を主とする砂粒が全体的に含まれている。付着物としては、煤状炭化物が外面の胴部に認められる程度であり、他には認められない。色調は、灰白色～褐色を呈し、バラエティに富むが、灰白色の破片は風化によって退色したものと考えられる。

以上の諸特徴より、これらは、時期的に捺糸文を施す弥生中期後葉～後期頃のものと同推察されるが、断定はできない。なお、交互刺突文が施される土器は出土していない。（木村 高）

（註）縦走縄文の節はあまり傾いておらず、一般的に「単節」と称するものと同じであるため、絡条体による回転施文の可能性は低いと考えられる。また、絡条体を用いて綾繰状・矢羽状の捺糸文のみを施すのは不自然に思えるが、①縦走縄文と捺糸文が垂直に交わる。②縦走縄文を捺糸文が切る。③捺糸文の節がかなり斜めに傾く。の3点より、両者は同時施文ではないと判断した。

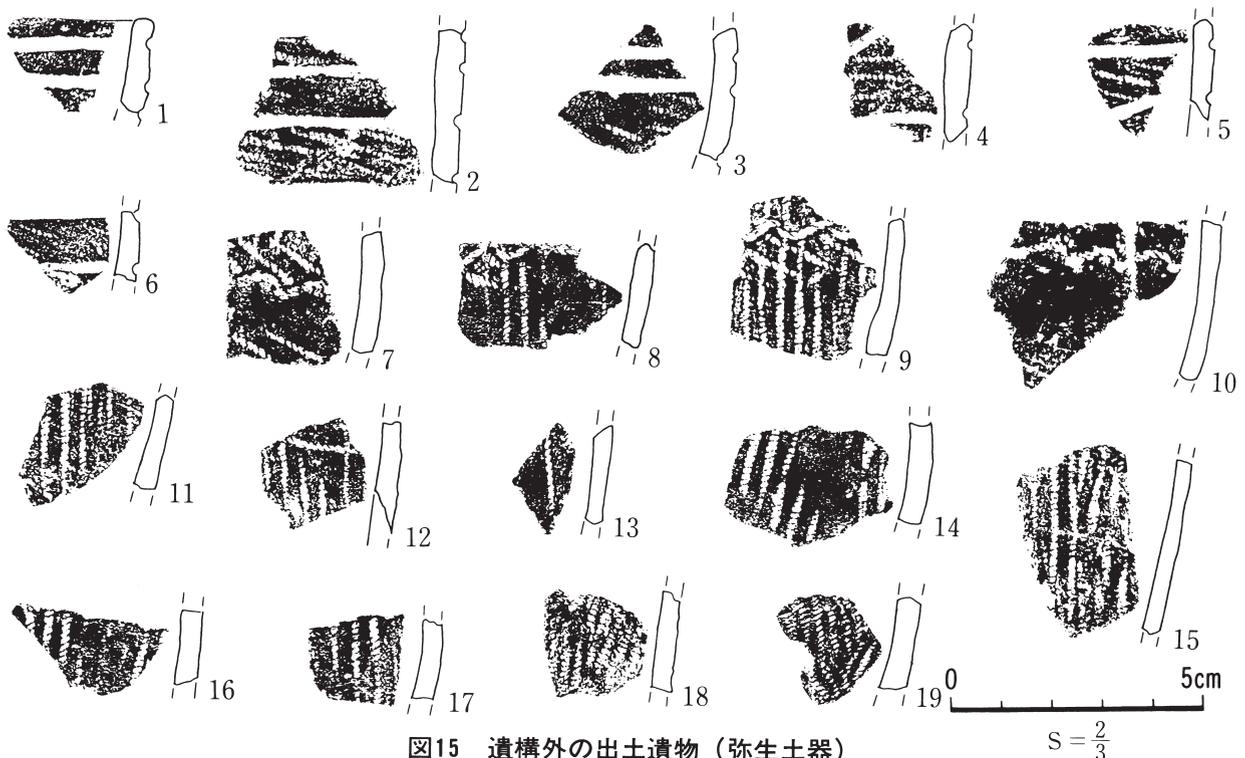


図15 遺構外の出土遺物（弥生土器）

続縄文土器（図16；1）

調査区西側の平坦地より1片だけ出土した。深鉢形土器の体部上半と思われる。RL帯縄文の上に2本単位の微隆起線を貼り付けたものである。胎土は1mm以下の砂粒を含むが良好である。器厚は約6mmで、硬く焼きしめられており、外面は暗褐色、内面はにぶい褐色を呈す。帯縄文は2本の縞状に施文されている。2本単位の微隆起線はへりをこすってなでつけられており、断面形は三角形になっている。2本単位の微隆起線は北海道の続縄文時代の後北C1式の特徴である。微隆起線のモチーフも、札幌市K135遺跡の後北C1式土器に見られるような亀甲形になりそうである。しかし、後北C1式土器には、2本単位の微隆起線によって区切られた中に、1条及び2条の三角状刺突を施すものがほとんどであり、本例の様に帯縄文を施すのは、次の後北C2-D式に移行してからである。また、器厚・焼成も北海道におけるC1式土器のものより薄手で良好のようである。小片のため判然としないが、後北C1式の最終末からC2-D式の最古段階に位置づけられると思われる。尚、新潟県の打越遺跡、北海道の聖山遺跡のKⅡ群土器（1979、七飯町教育委員会）に類例が見られる。（赤羽 真由美）

第Ⅶ群 土師器・須恵器（図16；2～4）

土師器が2片、須恵器が5片出土したのみである。いずれも細片であるため、須恵器2片と土師器1片のみ図示した。2は須恵器の大甕の胴部である。表面にはタタキメがあり、色調は灰色を呈す。3は内外面とも自然釉がかかって光沢を帯びている。表面にはタタキメ、内面にはあて具痕がある。色調は黒色を呈す。4は、土師器の坏の底部である。胎土は砂粒を含むが良好で、色調はにぶい黄橙色である。器の内外面にはナデ調整が施されており、底部は上げ底気味である。（赤羽 真由美）

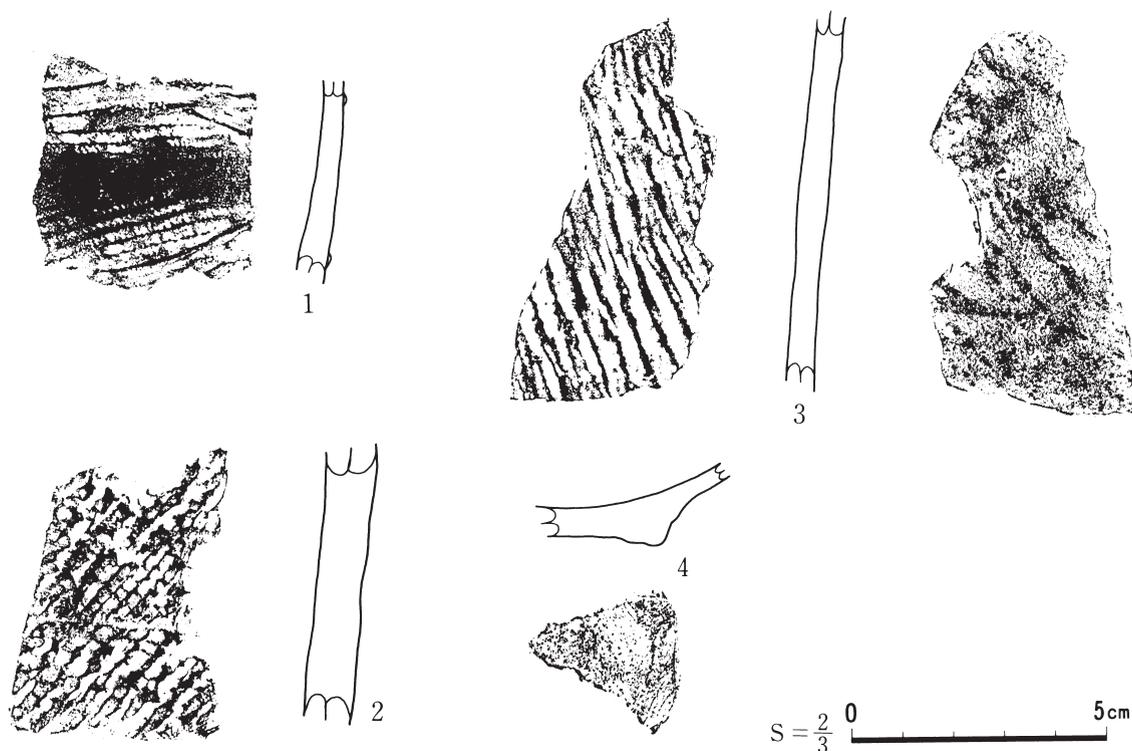


図16 遺構外の出土遺物（続縄文土器・土師器・須恵器）

土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器形	部位	文 様 特 徴	備 考
15-1	E-65	耕作土	甕	口縁部	口唇部に縄文 横走沈線 3 条	
2	E-65	—	甕	頸部	RL縄文→横走沈線 4 条	
3	E-76	耕作土	甕	頸部	RL縄文→横走沈線 3 条	
4	E-65	—	甕	頸部	RL縄文→横走沈線 1 条 斜位沈線 1 条	
5	E-65	—	甕	頸部	RL縄文→横走沈線 1 条 斜位沈線 1 条	
6	E-64	III	甕	頸部	RL縄文→横走沈線 2 条	
7	E-65	耕作土	甕	胴部	RL縄文 (縦位と斜位) 綾線 1 条	
8	E-65	—	甕	胴部	RL縄文→綾線 1 条	内面横ナデ
9	E-65	耕作土	甕	頸部	RL縄文→綾線 1 条 (矢羽状)	
10	E-64	III	甕	胴部	RL縄文→綾線 1 条	
11	E-65	III	甕	底部付近?	RL縄文	内面横ナデ
12	E-65	III	甕	胴部	RL縄文	
13	—	—	甕	底部付近?	RL縄文	
14	F-65	II	甕	胴部	RL縄文	内面横ナデ
15	E-65	—	甕	胴部	RL縄文	
16	E-65	—	甕	胴部	RL縄文	内面横ナデ
17	E-65	耕作土	甕	胴部	RL縄文	
18	G-96	—	甕	胴部	RL縄文	縄文の節が小さい
19	E-65	III	甕	胴部	RL縄文	縄文の節が小さい
16-1	I-61	I	深鉢	胴部	RL帯縄文→微隆起線貼付	砂粒含む 焼成良
2	I-70	III	大甕	胴部	須恵器 タタキメ	
3	—	—	—	胴部	須恵器 タタキメ	
4	G-91	III	杯	底部	土師器 上げ底	海綿骨針混入 内面ナデ

第2節 石器ほか

(1) 縄文時代の石器 (図17~19)

本遺跡から出土した縄文時代の石器は26点であり、調査面積と比してそれほど多くはない。器種としては石鏃・石槍・尖頭器・石匙・不定形石器・石核・磨製石斧・敲磨器・片刃の礫石器等が見られる。これらはすべて、遺構外からの出土である。

石鏃 (図17 ; 1~ 4) は4点出土している。基部の形状は、1は有茎平基であり、2は有茎凸基、3は無茎尖基である。4は無茎平基であり、特に刃部に細かな調整がなされ、凹凸の激しい特殊な形状を呈する。いずれも石質は珪質頁岩である。

石槍 (図17 ; 5) は基部が折損した状態で1点出土している。石質は珪質頁岩である。

尖頭器 (図17 ; 6) は1点出土している。刃部は先端部から基部に至るまで両面とも細かな調整が施されている。石質は珪質頁岩である。

石匙 (図17 ; 7. 8) は2点出土している。8は片面に火を受けており、先端部が折損している。7・8ともに片面のみの調整で縦型、石質は珪質頁岩である。

不定形石器 (図17 ; 9・図18 ; 1~6) は7点出土している。3はノッチの部分調整した刃部が潰れた状態である。1・2・4・5はいわゆるU-フレイクの類いに分類される。石質は、珪質頁岩点、流紋岩1点である。

石核 (図19 ; 1) は1点出土しており、石質は珪質頁岩である。

磨製石斧 (図19 ; 2~5) は4点出土しており、どれも丁寧に研磨されているが、すべて折損品である。石質は、緑色細粒凝灰岩2点、花崗斑岩1点、ひん岩1点である。

敲磨器 (図19 ; 6~10) は5点出土している。内訳は、磨石2点 (6・7)、敲石1点 (10)、凹石1点 (8)、片面に剥離を集中して加え、刃部を形成している。石質は流紋岩である。 (相澤 治)

石器計測表

図版番号	出土地点	層	器種	最大計測値				石質	備考
				長(m)	幅(m)	厚(m)	重(g)		
図17-1	H-66	I	石鏃	(35)	13	4	1.6	珪質頁岩	先端部折損
-2	J-100	VI	石鏃	(50)	14.5	5	2.7	珪質頁岩	先端部折損
-3	L-87	I	石鏃	(50.5)	16	4.5	3.0	珪質頁岩	先端部折損
-4	K-66	II	石鏃	24	21	3	0.9	珪質頁岩	
-5	F-82	I	石槍	43	21	10	10.4	珪質頁岩	基部折損
-6	J-87	V	尖頭器	90	13	7.5	8.1	珪質頁岩	
-7	I-63	I	石匙	65	31	9.5	17.9	珪質頁岩	
-8	H-82	I	石匙	(47)	39	8	10.8	珪質頁岩	折損品、火を受けている
-9	H-72	III	不定形	83	30	16.5	59.1	珪質頁岩	
図18-1	J-61	I	不定形	55	45	11.5	16.1	流紋岩	U-フレイク
-2	J-69	III	不定形	47	30	9	10.0	珪質頁岩	U-フレイク
-3	K-77	I	不定形	94	51	18	70.8	珪質頁岩	大きなノッチ有
-4	H-62	-	不定形	33	37	8	8.6	珪質頁岩	U-フレイク
-5	J-62	-	不定形	36	31	7.5	7.9	珪質頁岩	U-フレイク
-6	I-62	I	不定形	47	25	6.5	8.1	珪質頁岩	

図版番号	出土地点	層	器種	最大計測値				石質	備考
				長(m)	幅(m)	厚(m)	重(g)		
図19-1	I-97	I	石核	141	111	63	921.3	珪質頁岩	
-2	F-72	III	磨斧	(32)	(26.5)	(19)	12.3	緑色細粒凝灰岩	刃部の一部
-3	H-63	I	磨斧	(37)	(31)	(11)	14.5	緑色細粒凝灰岩	基部の一部
-4	L-82	IV	磨斧	(61)	(37)	(28)	102.0	花崗斑岩	基部のみの折損品
-5	L-97	IV	磨斧	(65)	(40)	(27)	110.7	岩	基部のみの折損品
-6	K-62	I	敲磨器	70	69	19	95.8	凝灰岩	磨石
-7	I-29	-	敲磨器	78	40	40	145.7	流紋岩	磨石
-8	I-62	-	敲磨器	82	41	45	130.2	凝灰岩	凹石、折損品
-9	K-39	-	敲磨器	(81)	100	(69)	502.3	凝灰岩	凹石+敲石、折損品
-10	I-61	-	敲磨器	142	72	44	688.6	安山岩	敲石
-11	M-61	I	片刃の礫石器	151	76	48	580.7	流紋岩	

(2) 陶磁器 (図20 ; 1~ 11)

本遺跡の遺構外より、デスクトレイで約半分ほどの陶磁器が出土している。時期的には中・近世から近代、現代に至るものまで見られる。近世のものとしては、肥前・唐津の陶磁器が主体であるが、出土した陶磁器の大半は近・現代のものである。また、大正から昭和のものと思われる碗の破片に鉛ガラス焼き接ぎの痕跡が認められる例が1点見られる。主な出土陶磁器の観察結果を以下の表にまとめたが、ここでは明治以前のものに限り観察の対象とした。また、観察表に記した年代観については大橋康二氏による肥前陶磁の年代区分(大橋1989)を基にした。(相澤 治)

陶磁器観察表

図版番号	出土地点	層位	産地	名称	器形	生産年代	特徴
図20-1	F-69	II	肥前	色絵	油壺	1690~1780	
-2	K-75	I	肥前	染付	瓶	1690~1780	外面網目文
-3	I-62	-	肥前系	染付	碗	1780~1860	
-4	K-64	I	肥前系?	染付	碗	1780~1860?	瀬戸産の可能性有
-5	F-65	I	唐津	陶器	壺	?	外面鉄塗
-6	F-69	II	唐津	陶器	搦鉢	1630~1650	内外面無釉、内面卸目
-7	M-64	カクラン	唐津	陶器	搦鉢	1630~1650	内外面鉄釉、内面卸目
-8	H-98	I	唐津?	陶器	火入れ	18C?	外面白化粧土による刷毛目、透明釉
-9	I-62	I	在地系?	陶器	壺	?	外面鉄釉、白岩焼の壺の底部に似る
-10	J-61	II	?	陶器	焜炉?	19C?	内外面無釉
-11	I-62	II	?	瓦質	搦鉢	15~16C	

(3) 銭貨 (図20 ; 12・13)

遺構外から、江戸時代に鑄造された寛永通寶が2点出土している。

12は、G-75グリッド第II層から出土しており、直径2.3cm、穿孔0.6cm、外輪幅0.2cm、外輪厚0.15cm、重さ2.4gを計る。13は、I-16グリッド第I層から出土しており、直径2.3cm、穿孔0.6cm、外輪幅0.2cm、外輪厚0.15cm、重さ2.9gである。「永」の字が辛うじて判別できたが、12よりかなり腐蝕が進んだ状態であった。(相澤 治)

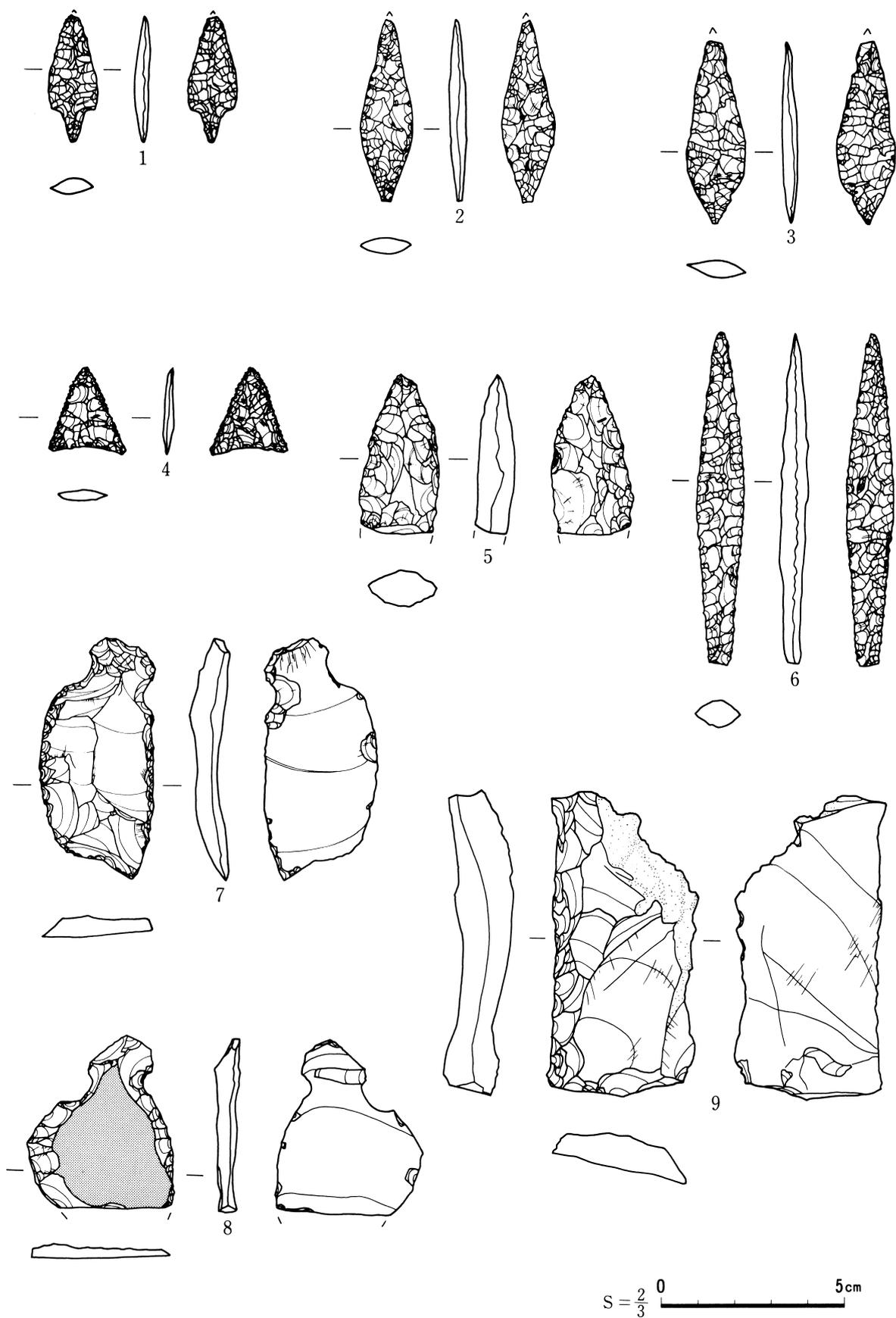


図17 遺構外の出土遺物（縄文時代の石器その1）

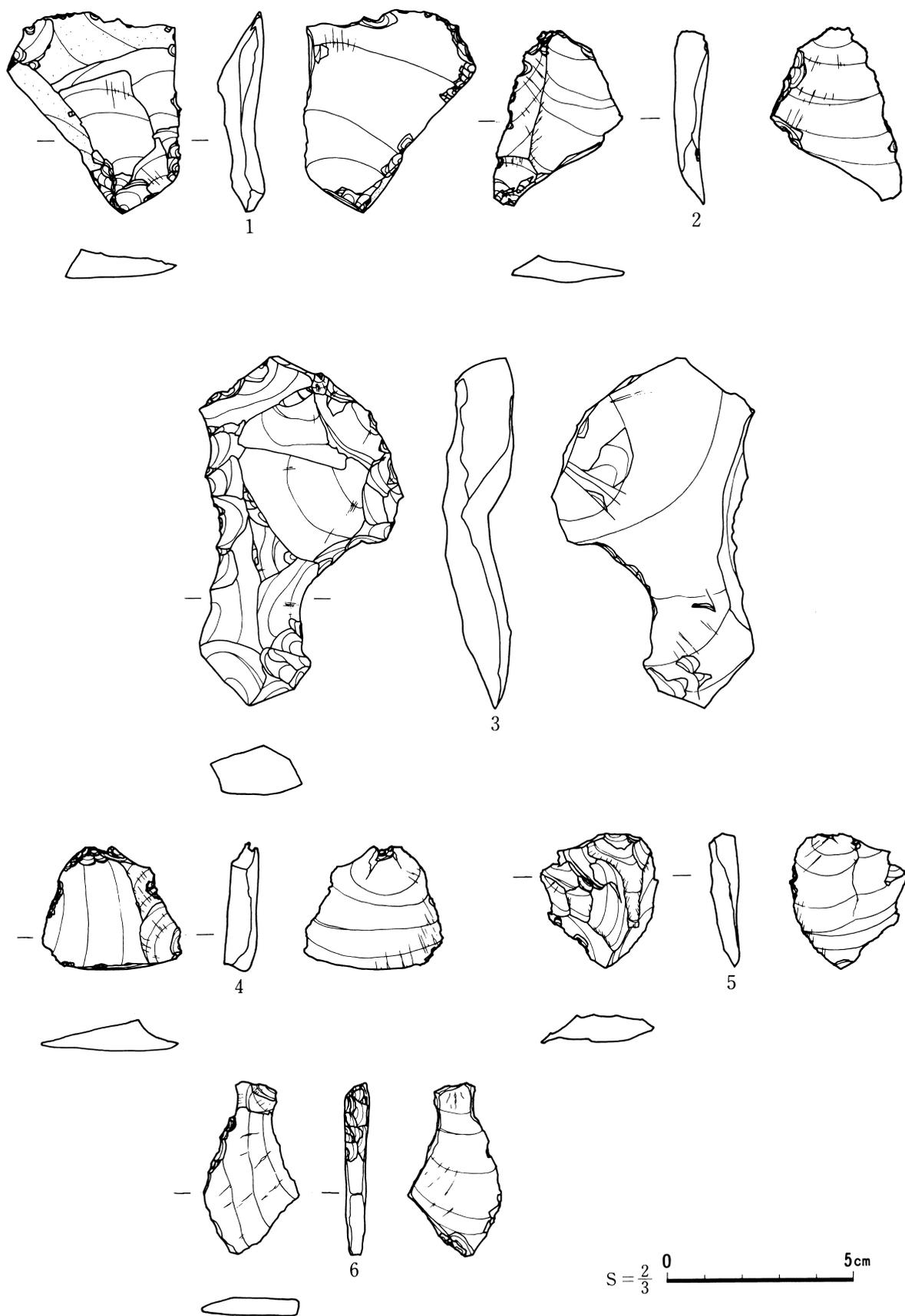


図18 遺構外の出土遺物（縄文時代の石器その2）



図19 遺構外の出土遺物（縄文時代の石器その3）

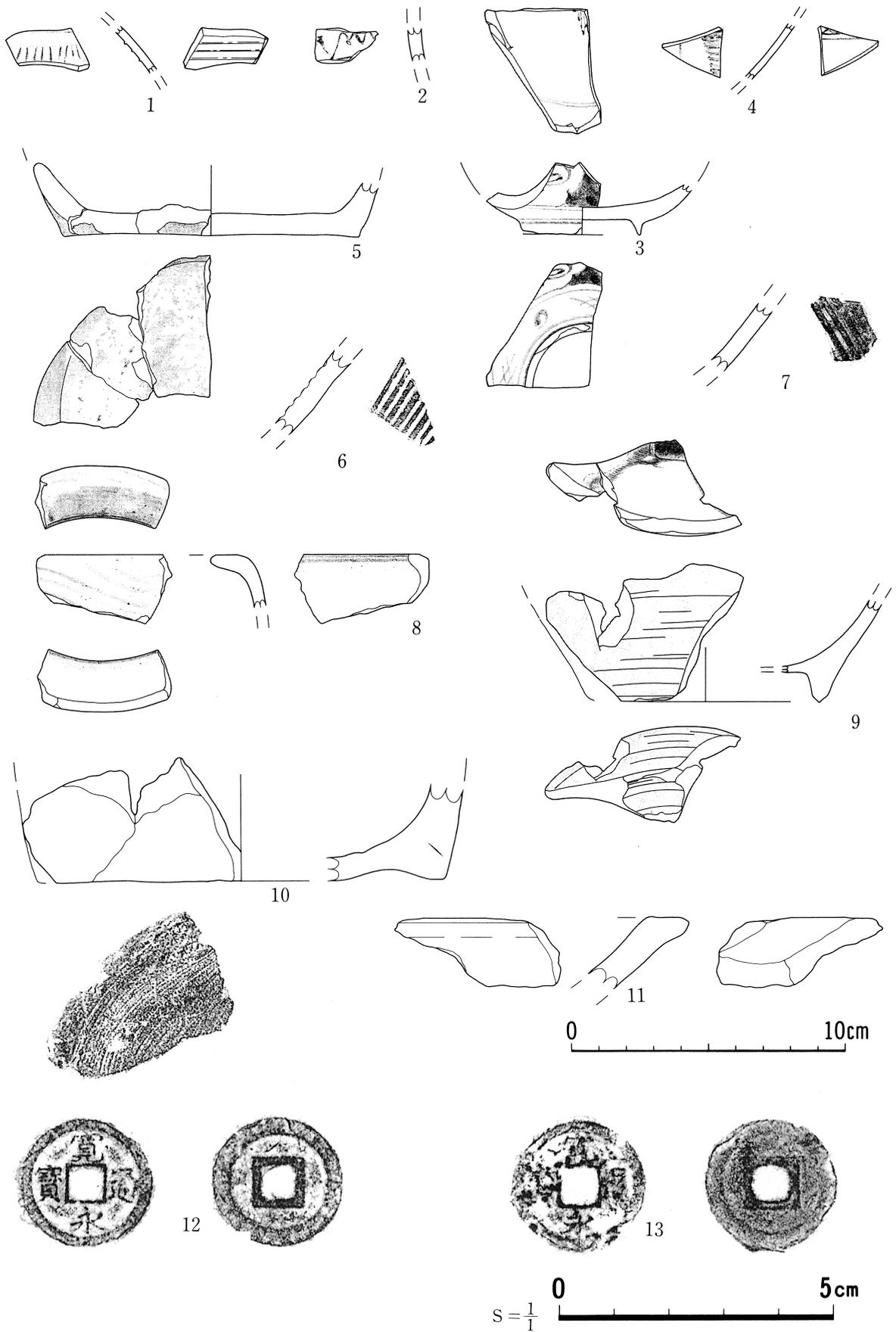


図20 遺構外の出土遺物（陶磁器・銭貨）

第V章 まとめ

1 遺跡の立地

本遺跡は、前田野目川から約400m離れた、前田野目川の河岸段丘と大釈迦丘陵の境に位置している。調査区は河岸段丘の平坦面と丘陵地の斜面とからなり、標高は62mから72mまでである。本遺跡の周辺には、真言館跡（館跡）、前田野目川を挟んだ対岸には、隠川遺跡（平安時代・集落跡）、持子沢窯跡群（平安時代・窯跡）など、平安時代を中心とした遺跡が数多く立地している。

2 検出遺構

平安時代の土坑3基、時期不明の土坑2基、平安時代以前の焼土状遺構14基、明治時代以降の道跡3条が検出された。

3 出土遺物

出土遺物はかなり希薄に、調査区全体に散布していた。斜面と平坦面の境の二カ所の緩い谷地形からは流されたいらしい土器片がある程度まとまって検出された。

縄文時代の遺物は、晩期の粗製土器を中心として、前期、中期、後期の土器片、その他縄文時代の石器が段ボール4箱分である。また、弥生時代後葉の土器片、北海道を中心として青森県にも分布する後北式土器片、平安時代の土師器、須恵器、近世から近代にかけての陶磁器片、銭貨が出土した。縄文時代の遺物以外はごく微量であった。

4 まとめ

本遺跡は、平安時代の遺跡が付近に立地しているにもかかわらず、一時的な焼き火のあとが確認されたのみであり、遺物も土師器・須恵器などはほとんど検出されなかった。遺構・遺物の希薄さから見て、本遺跡はどの時代においても、居住域ではなく、その外縁であったということが出来る。遺物は希薄であったが、その中に弥生時代の土器片、続縄文時代の土器片が含まれていたことは注目される。五所川原市付近の当該時代の暮らしと人の動きを知る手がかりとなる資料である。

(赤羽 真由美)

引用・参考文献

- 青森県立郷土館 1984 『亀ヶ岡石器時代遺跡』
青森県教育委員会 1992 『野脇遺跡』
新潟県教育委員会 1983 『内越遺跡』
木村 高 1996 「東北地方－後北C2・D式土器、北大I式土器の周辺－」『北海道考古学』第30輯
木村 高 1996 「青森市玉清水（1）遺跡出土の後北式土器」『青森県考古学』第9号
七飯町教育委員会 1979 『聖山－北海道亀田郡七飯町における縄文時代遺跡の調査－』
五所川原市教育委員会 1996 『真言館跡』
札幌市教育委員会 1987 『K135遺跡 4丁目地点5丁目地点』



調査前風景
(調査区中央より東を望む)

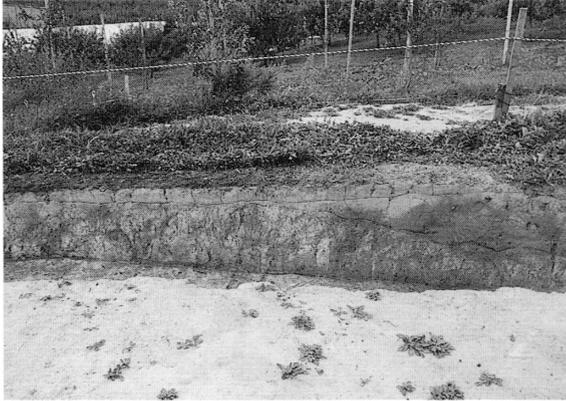


調査後風景
(同上)



調査後風景
(調査区中央より西を望む)

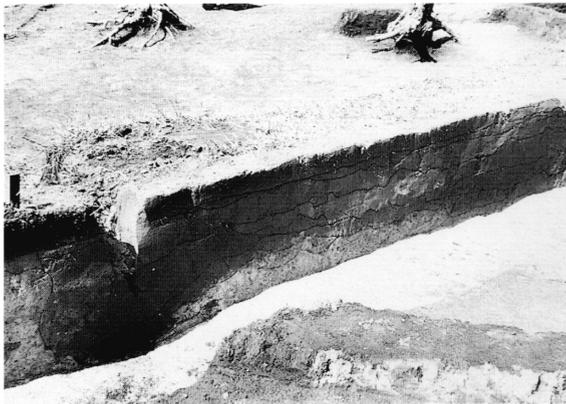
写真1 遺跡風景



Fライン F-81付近



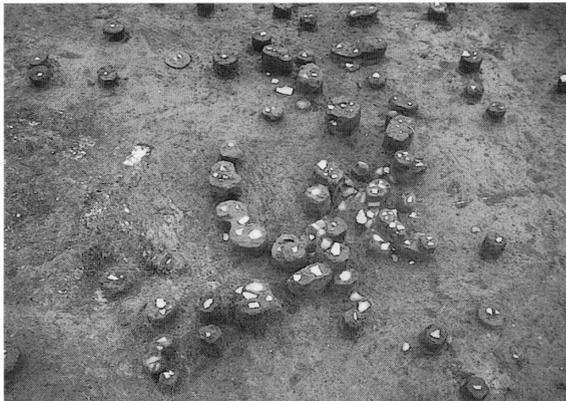
Fライン F-69付近



102ライン K-102付近



102ライン I-102付近



土器散布状況 (L-110グリッド付近)



土器散布状況 (H-70グリッド付近)

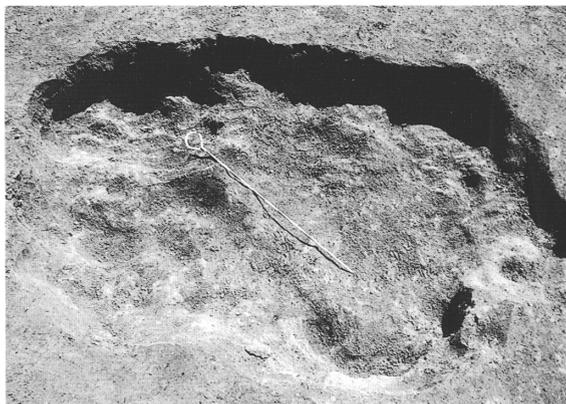


尖頭器出土状況

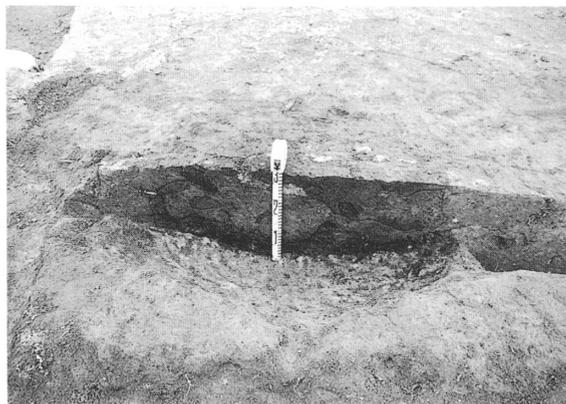


作業風景

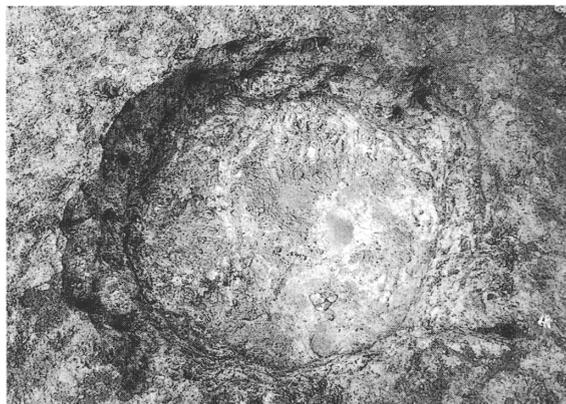
写真2 土層観察・遺物出土状況



第1号土坑



第1号土坑セクション



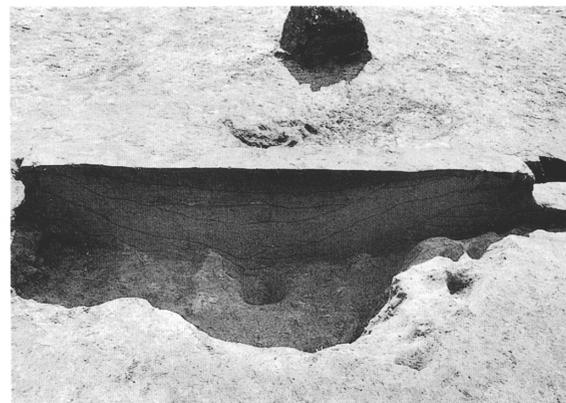
第2号土坑



第2号土坑A A'セクション



第3号土坑



第3号土坑A A'セクション



第4号土坑



第4号土坑セクション

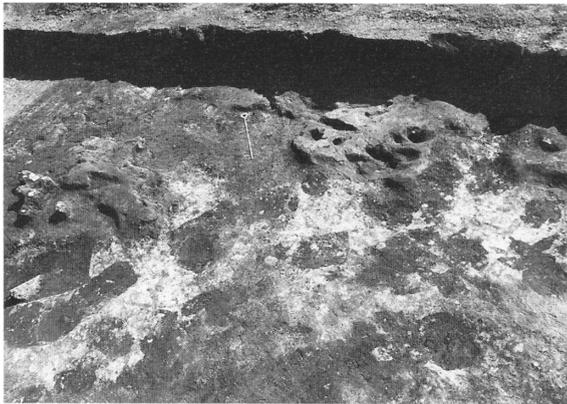
写真3 第1号～第4号土坑



第1号焼土



第1号焼土セクション



第2号～第4号焼土



第1～第3号焼土セクション



第3号焼土セクション



第4号焼土セクション

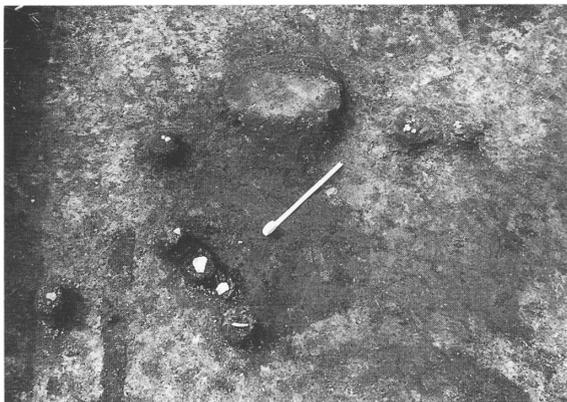


第6号焼土セクション

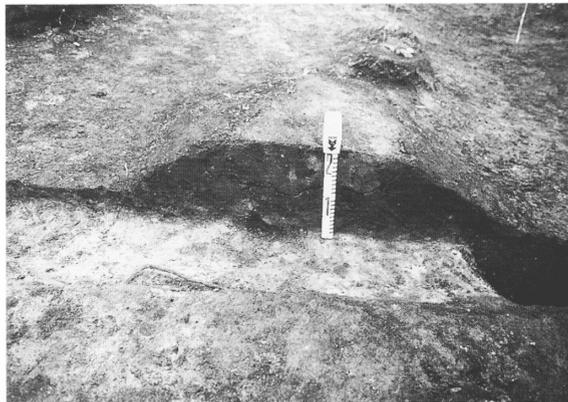


第7号焼土セクション

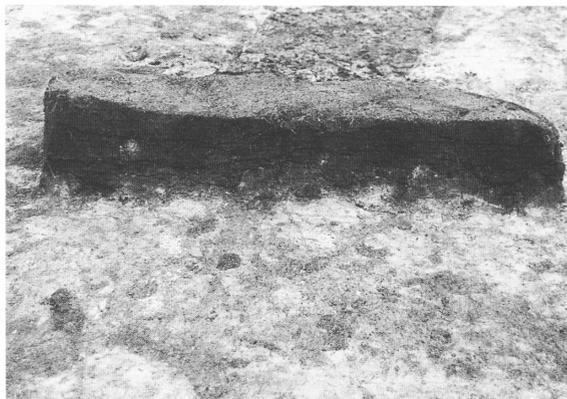
写真4 第1号～第4号・第6号・第7号焼土



第9号焼土



第9号焼土セクション (右隣は第2号土坑)



第8号焼土セクション



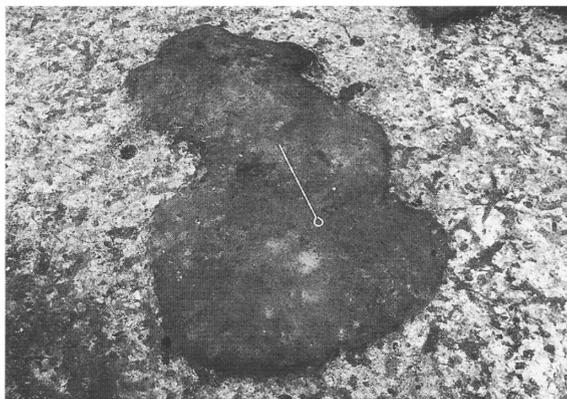
第2号焼土CC'セクション



第10号焼土(左)・第11号焼土(右)



第10号・第11号焼土セクション



第12号焼土



第12号焼土セクション

写真5 第8号～第12号焼土

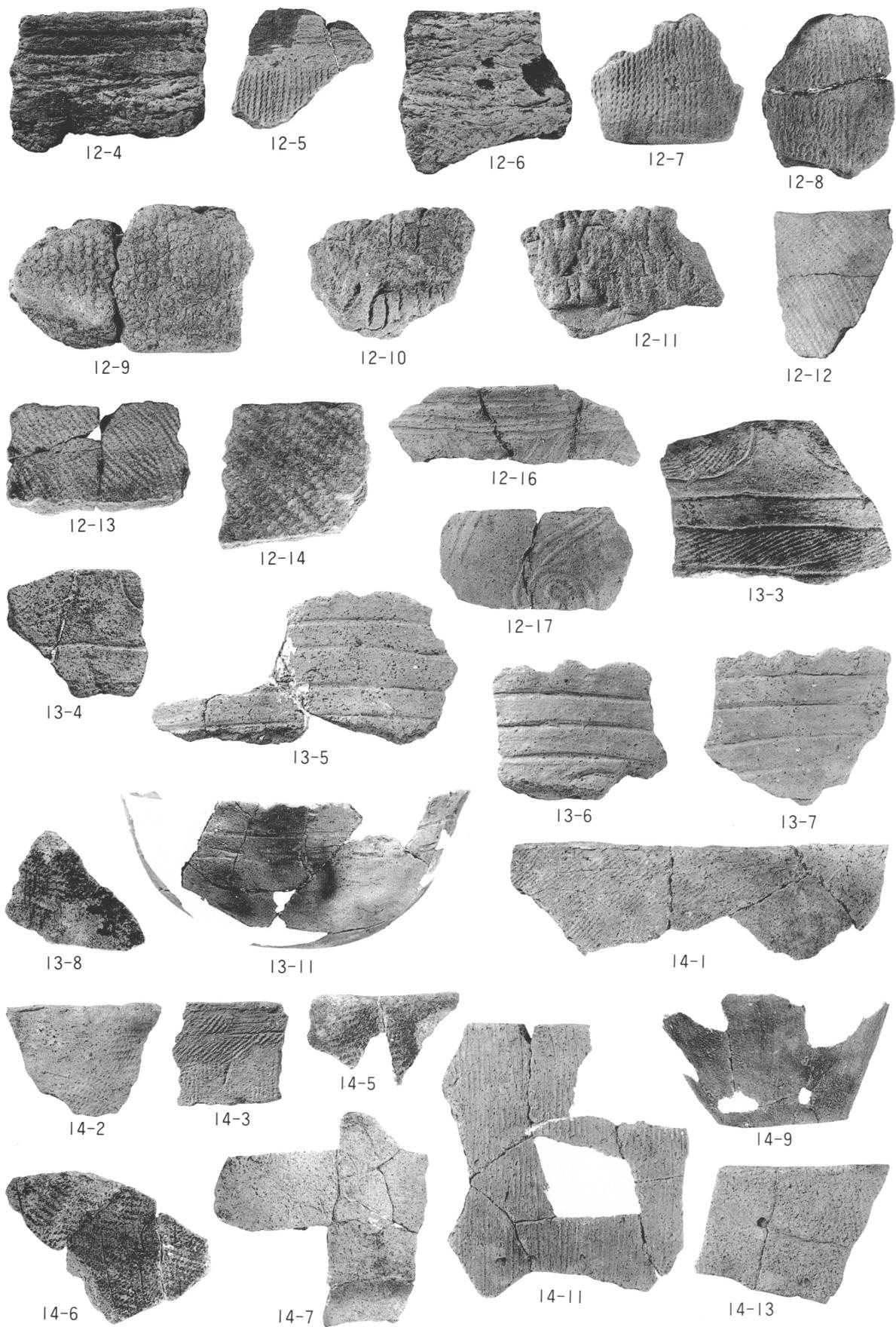


写真 6 遺構外の出土遺物（土器）

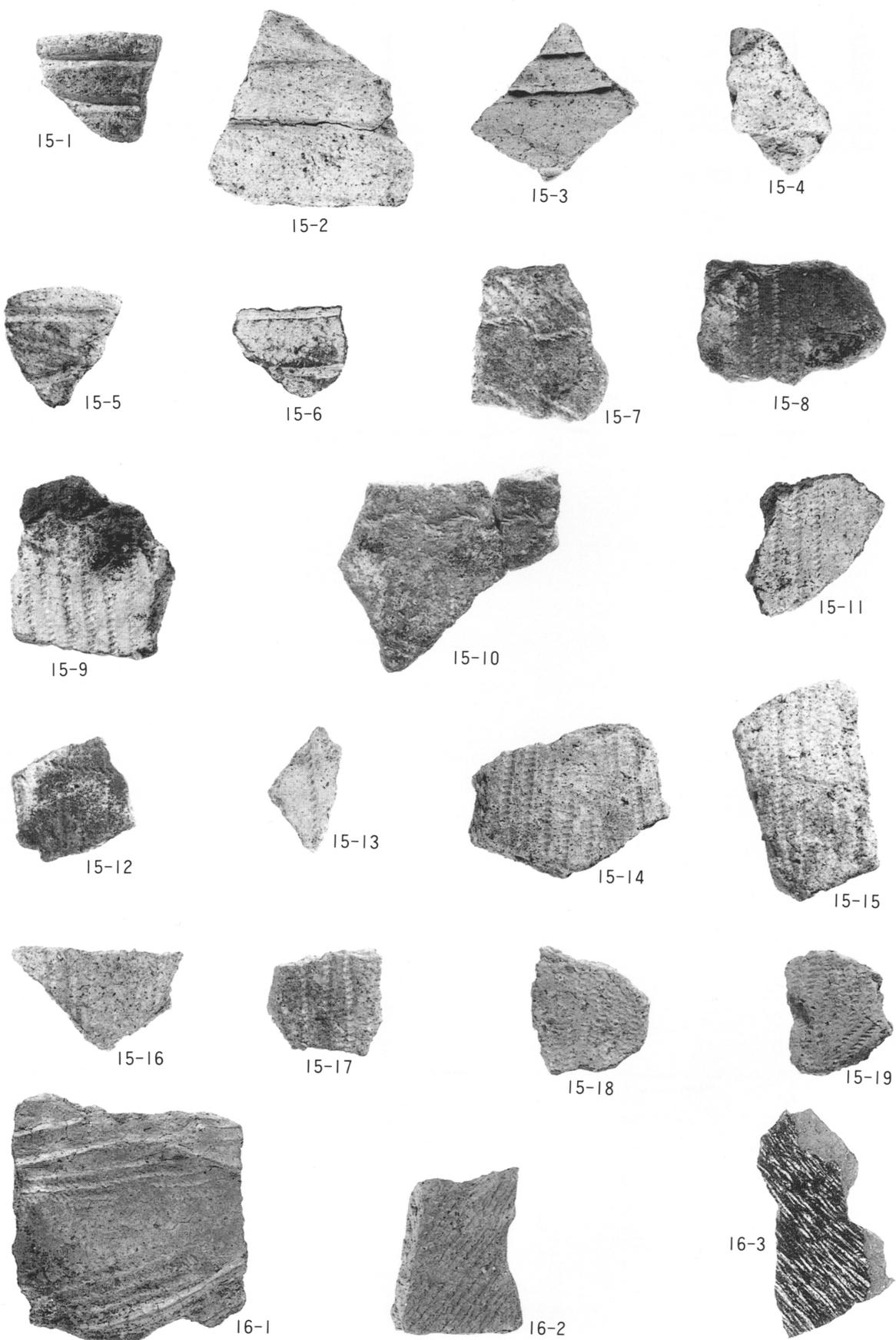


写真7 遺構外の出土遺物（土器）

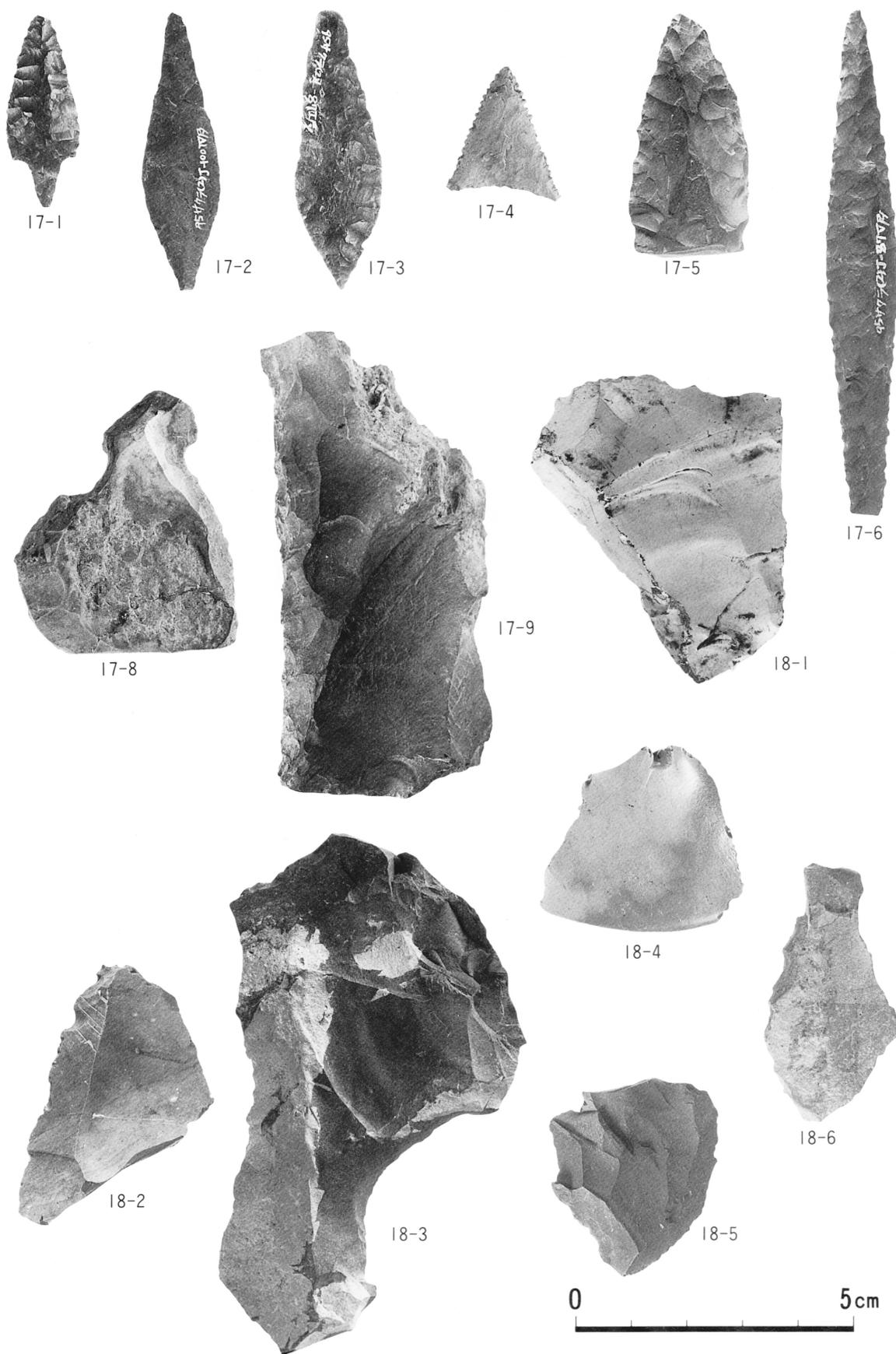


写真8 遺構外の出土遺物（石器）



19-1



19-2



19-4



19-3



19-5



19-6



19-7



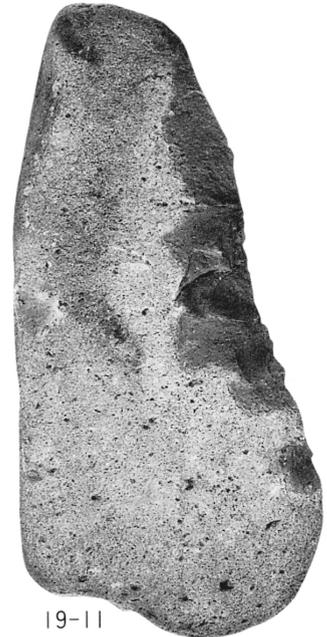
19-8



19-9



19-10



19-11



写真9 遺構外の出土遺物（石器）

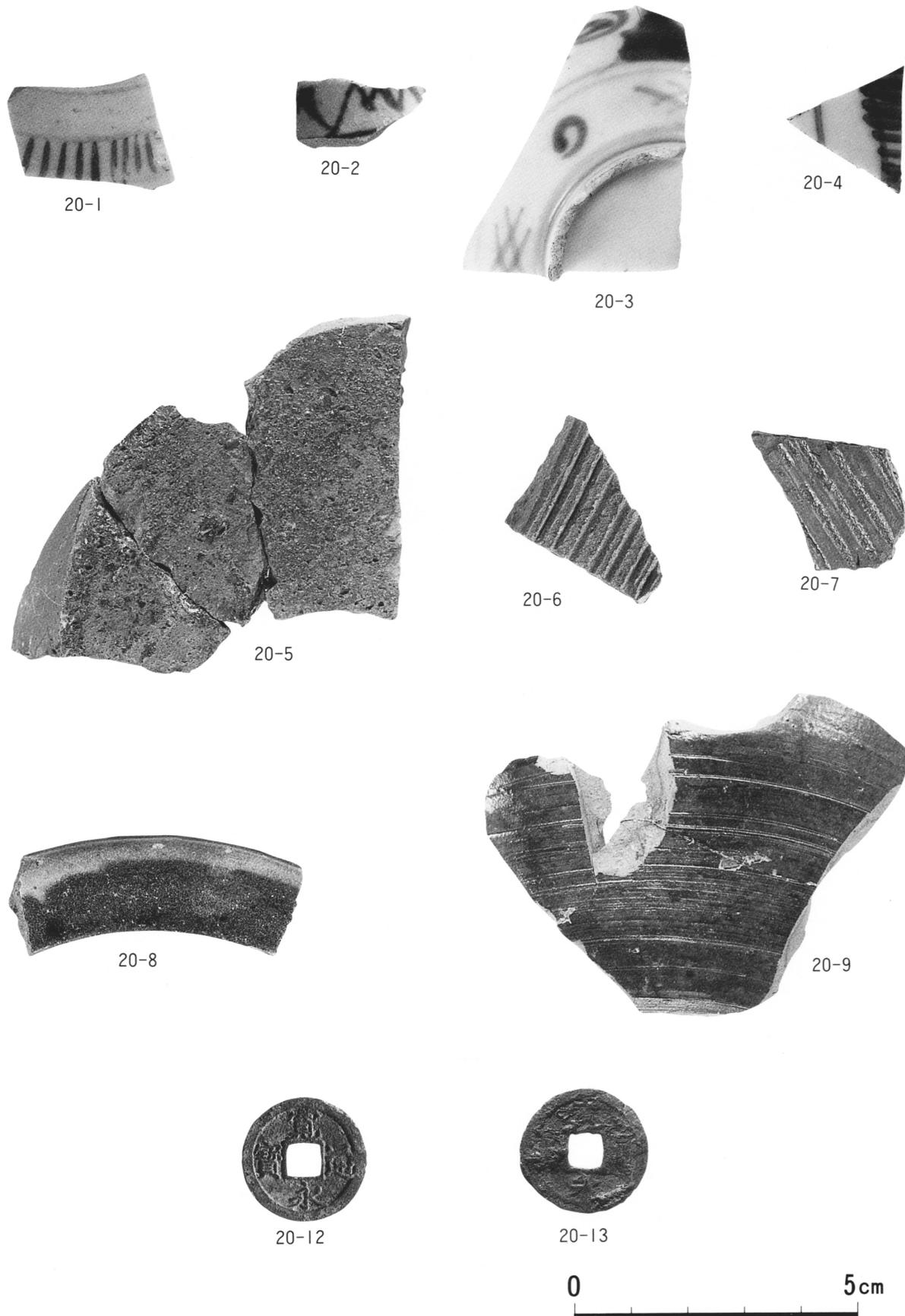


写真10 遺構外の出土遺物（陶磁器・銭貨）

報 告 書 抄 録

ふりがな	さくらがみね(2)いせき							
書名	桜ヶ峰(2)遺跡							
副書名	国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第208集							
編著者名	相澤 治、赤羽 真由美							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038 青森市大字新城字天田内152-15 TEL0177-88-5701							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
さくらがみね(2)いせき 桜ヶ峰(2)遺跡	あおもりけん 青森県 ごしよがわら 五所川原 市大字前 だのめあざ 田野目字 さくらがみね 桜ヶ峰 86-9、外	市町村	遺跡番号	°′″	°′″	19950717 ～ 19951102	5200m ²	国道101号 浪岡五所川 原道路建設 事業
02-205	05-059	40度 44分 53秒	140度 33分 21秒	主な遺物		特記事項		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
桜ヶ峰(2) 遺跡	散布地	縄文時代	土坑1基?	土器：前期・中期・後期・晩期 石器				
		弥生時代	なし	土器：弥生時代後期				
		続縄文時代	なし	土器：後北C ₁ ～C ₂ -D式 1片				
		平安時代	土坑3基	土師器・須恵器 微量				
		近代	道跡	なし				
		不明	焼土14基 土坑1基	なし なし				

青森県埋蔵文化財報告書第208集

桜ヶ峰(2)遺跡

—国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 平成9年3月31日

発行 青森県教育委員会

〒030 青森市新町二丁目3-1

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038 青森市新城字天田内152-15

TEL：0177-88-5701、FAX：0177-88-5702

印刷所 青森オフセット印刷株式会社

〒030 青森市本町二丁目11-16

TEL：0177-75-1431